

平成 18 年度マスターセンター補助事業

特異な世界遺産・石見銀山についての調査研究

報 告 書

平成 19 年 1 月

社団法人 中小企業診断協会島根県支部

目 次

はじめに

第1章	石見銀山遺跡と世界遺産	1
1.	世界遺産	1
2.	石見銀山遺跡の歴史と評価	4
3.	世界遺産登録の可能性	7
第2章	世界遺産と地域振興	10
1.	世界遺産に指定された国内事例	10
2.	世界遺産と地域おこし	12
第3章	石見銀山遺跡の現状と問題点	17
1.	地域の現状	17
2.	遺跡の概要	23
3.	石見銀山の問題点	33
第4章	石見銀山スタイルの確立	35
1.	基本コンセプト	35
2.	遺跡整備の方向性	38
3.	支援設備の整備	44
第5章	石見銀山遺跡による観光振興	55
1.	観光振興による「まちづくり」	55
2.	町並み保存・環境保存地区の観光振興取組み事例	61
3.	観光戦略の展開	62
第6章	石見銀山協働会議に対する期待	70
1.	石見銀山スタイルと協働会議の発足	70
2.	産学官の連携と強化	70
3.	協働会議による展開	72

おわりに

はじめに

石見銀山遺跡の世界遺産登録が目の前に迫ってきました。本年7月に登録されれば、日本で14番目の世界遺産になるわけです。この世界遺産は（登録を前提に話しをすすめるわけですが）「特異」です。遺跡来訪者から見て、非常に分かりづらい。広大な遺跡のほとんどが竹林、草木に覆われて眠っていることから、見た目だけではこの遺跡の全体像や歴史的、文化的背景の全容を把握することはまず不可能です。従って、いかにこの遺跡の価値を限られた時間の中での訪問者に理解してもらうかがキーポイントの一つになります。

また、この遺跡の発掘や調査が行われたのはほんのわずかな部分であり、今後数十年をかけて発掘・調査を行っていく必要があります。また、これらを適切に保存していくことが求められています。

世界遺産登録後もユネスコのモニタリング制度により、6年ごとに保全状況の報告と受審が義務づけられています。「人類共通の未来に伝えていくべき価値があり、民族、国境を越えて国際的に協力して保護する必要がある文化財」という世界遺産の趣旨に沿った対応が求められることを考えれば、登録されてから、地元のわれわれの真価が問われてくると思います。

われわれは、お膝元の中小企業診断士として、この世界に誇る「石見銀山遺跡」の今後の保存方策、これを核にした地域の戦略展開について提言すべき義務感を強く感じました。

力不足ながら、現状分析、問題点指摘の後、今後の持続的な戦略展開について、短期、長期の視点から提言しております。

地元のみなさまが石見銀山を核とした地域活性化に取り組まれるうえでの一助となれば幸いです。

平成19年1月

社団法人中小企業診断協会島根県支部
支部長 井 脇 寛

なお、本調査に関わった機関、担当診断士は以下のとおりです。

社団法人中小企業診断協会島根支部
石見銀山調査委員会
担当診断士 遠藤励志・安井尚之・中林孝

第1章 石見銀山遺跡と世界遺産

1. 世界遺産

(1) 世界遺産とは

世界遺産について社団法人日本ユネスコ協会連盟では次のように述べている。

1. 人類共通のたからもの

世界遺産とは、地球の生成と人類の歴史によって生み出され、過去から引き継がれた貴重なたからものです。世界遺産にはさまざまな国や地域に住む人びとが誇る文化財や自然環境などがあります。なかには人類の残酷な歴史を刻むもの、また戦争や自然災害、環境汚染などにより危機にさらされているものも含まれています。それらは国際協力を通じた保護のもと、国境を越え今日に生きる世界のすべての人びとが共有し、次の世代に受け継いでいくべきものです。

2. UNESCOと世界遺産

UNESCO（国際連合教育科学文化機関：本部はフランスのパリ）は国際連合の専門機関です。日本国としてのUNESCOの窓口は、日本ユネスコ国内委員会（文部科学省内）です。

UNESCO内にあるUNESCO世界遺産センターは、世界遺産条約に基づき、顕著で普遍的な価値のある文化遺産や自然遺産を未来に守り伝えていくための国際協力の枠組みをつくり、世界各国に世界遺産条約への締結や世界遺産の保護を呼びかけています。

また、条約締約国に対し、世界遺産リストに登録すべき物件を推薦するよう働きかけ、世界遺産登録地の保存管理状況を報告するシステムを構築しています。その他、技術協力や専門的な研修の実施を支援することで、締約国が世界遺産の保護・保存・整備などを円滑に行えるように支援しています。特に「危機にさらされている世界遺産」に対しては、緊急援助を行うための調整を行っています。

3. 世界遺産条約

正式には「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」（Convention Concerning the Protection of the World Cultural and Natural Heritage）といます。世界中の顕著で普遍的な価値のある文化遺産・自然遺産を人類共通のたからものとして守り、次世代に伝えていくことの大切さを唱えている国際条約です。1972年のUNESCO総会で採択され、2006年1月現在、世界遺産条約の締約国数は182ヵ国にのぼります。日本は1992年に125番目の締約国として世界の仲間入りを果たしました。この世界遺産条約により、世界遺産リストの作成や登録された遺産保護支援を行う世界遺産委員会の設置が定められています。

4. 世界遺産委員会

世界遺産委員会（World Heritage Committee）は世界遺産条約に基づいて組織されており、締約国の中から異なる地域および文化を偏りなく代表するよう選ばれた 21 ヶ国によって構成されます。委員会の任期は原則 6 年間で、2 年に一度開かれる世界遺産条約締約国総会で改選されます。日本も 2003 年より委員会に名前を連ねています。ただし、最近は多くの国が委員に立候補するため、任期を自発的に短縮する国もあり、日本の任期も 4 年間、2007 年までとなっています。

世界遺産委員会は原則毎年 1 回開催され、新規に世界遺産に登録される物件や拡大案件、「危機にさらされている世界遺産」などの登録および削除、また、登録された遺産のモニタリングや技術支援、ワールド・ヘリテージ・ファンド（世界遺産基金）の用途などを審議、決定しています。

5. 世界遺産の種類

世界遺産には次の 3 種類があり、有形の不動産が対象となっています。

世界遺産	-----文化遺産	顕著な普遍的価値を有する記念物、建造物群、遺跡、文化的景観など
	-----自然遺産	顕著な普遍的価値を有する地形や地質、生態系、景観、絶滅のおそれのある動植物の生息・生息地などを含む地域
	-----複合遺産	文化遺産と自然遺産の両方の価値を兼ね備えている遺産

※種類別世界遺産リスト登録件数は 2006 年 7 月現在、文化遺産 644、自然遺産 162、複合遺産 24（合計 830）。

資料：社団法人日本ユネスコ協会連盟ホームページ（<http://www.unesco.or.jp/contents/isan/about.html>）より

(2) 日本国内の世界遺産

さて、現在日本国内で登録（□表示）又は暫定リスト入り（■表示）している世界遺産は次のとおりである。なお、暫定リストとは 5 年～10 年後に世界遺産としての登録を予定しているもので文化庁が決定したものである。

- | | |
|--|--|
| ☐ 法隆寺地域の仏教建造物（1993 年） | ☐ 日光の社寺（1999 年） |
| ☐ 姫路城（1993 年） | ☐ 琉球王国のグスク及び関連遺跡群（2000 年） |
| ☐ 屋久島（1993 年） | ☐ 知床（2005 年） |
| ☐ 白神山地（1993 年） | ☐ 紀伊山地の霊場と参詣道（2004 年） |
| ☐ 古都京都の文化財（1994 年） | ■ 古都鎌倉の寺院・神社ほか |
| ☐ 白川郷・五箇の合掌造り集落（1995 年） | ■ 彦根城 |
| ☐ 原爆ドーム（1996 年） | ■ 平泉の文化遺産 |
| ☐ 厳島神社（1996 年） | ■ 石見銀山遺跡 |
| ☐ 古都奈良の文化財（1998 年） | |

上記が現在日本国内の世界遺産として登録もしくは暫定リスト入りしているものである。登録されている13件の世界遺産のうち、白神山地、屋久島と知床の3件が自然遺産であり、残り10件はすべて文化遺産となっている。その多くは、すでに日本の観光地であるということが出来、実際に日本国民の多くも世界遺産＝観光地というイメージを持っていると思われる。そうした意味では世界遺産とは訪問者の視覚に訴えて「美しい」とか「見事だ」というように訪れた観光客に感動を与える観光施設とも言うことが出来る。そのような感動を与えるには何かモニュメント的な要素が不可欠である。また、日本の世界遺産に限らず世界中の世界遺産もその傾向があり、日本国内の旅行者が企画する世界各地の世界遺産めぐりのツアーを探してみると、そのほとんどが「世界遺産」という冠をつけたモニュメントや観光施設巡りツアーということが出来る。

(3) 鉱山に関する世界遺産

産業遺産としての登録はヨーロッパや中南米が先進地域であり、石見銀山が世界遺産として飛躍、発展していくためには大いに参考にすべきものがある。鉱山遺跡に登録された金・銀・銅に関する先進の鉱山都市は下の表の通りであり、いずれも鉱山遺跡を中心として芸術・信仰などをうまく絡めてその魅力を伝えている。

ただし、同じ世界遺産でもモニュメント性のある文化遺産や圧倒的な感動を与える自然遺産と異なり認知度は低く、したがって訪れる観光客も他の世界遺産に比べて少ない。一方で人類が築き上げてきた産業文化の偉大さを余すことなく伝えており産業遺産としての存在感を示している。

	遺産名 / 概要	所在国	登録年
1	レーロース／厳しい自然に開かれた銅鉱山町	ノルウェー	1980
2	ポトシ市街／世界最大の銀鉱山とともに栄えた町	ボリビア	1987
3	古都ゲアファと近隣鉱山／スペインの繁栄を支えた銀鉱山と芸術の都	メキシコ	1988
4	ランメルスベルグ鉱山と古都ゴッスラー／神聖ローマ帝国を支えた銀鉱山町	ドイツ	1992
5	サカテカスの歴史地区／メキシコ初のシルバーラッシュに沸いた都市	メキシコ	1993
6	バンソスカ・シュティアウニツァ／隆盛と衰退を経験した最古の金銀鉱山都市	スロバニア	1993
7	クナ・ホラの歴史地区／銀鉱山町としてのかつての繁栄を偲ばせる史跡	チェコ	1995
8	ラス・メデウス／山をなして連なる古代ローマの金鉱山の廃坑	スペイン	1997
9	ファールンの大銅山地域／1000年以上の歴史を誇る銅鉱山	スウェーデン	2001
10	ゴイアスの歴史地区／中央高原に築かれた金鉱山町	ブラジル	2001
11	コンウォールとウェストデボン／銅と錫が織りなす産業遺跡	英国	2006
12	シーウェル鉱山都市／鉱山に築かれた銅の企業都市・鉱山都市	チリ	2006

＝鉱山に関する世界遺産＝ 世界遺産データブック、島根県教育庁文化財課作成パンフより再作成



写真：ボリビアのポトシ市のセロ・リコ銀山。1545 年発見され石見銀山と同時代に栄えた。

2. 石見銀山遺跡の歴史と評価

(1) 石見銀山の歴史

石見銀山にかかる主な歴史的な出来事は次のとおりである。

時代	年 号	西暦	出 来 事
鎌倉	延慶 2 年	1309	初めて石見銀山が発見されたという（「銀山旧記」）
室町	大永 6 年	1526	神屋寿禎、石見銀山発見（「銀山日記」）
	天文 2 年	1533	灰吹法による銀精錬開始 大内氏銀山領有
	永禄 11 年	1568	ポルトガル/ドランド地図に「銀鉱山王国」の記載
安土桃山	慶長 6 年	1601	大久保長安、初代奉行
	慶長 7 年	1602	年産 4000 貫=15 トンの銀産出
江戸	慶長 8 年	1603	安原備中、年 3600 貫=13.5 トン運上、家康謁見
	寛永元年	1624	銀産出量減少（年 2200 貫=8.2 トン）
	天和 2 年	1682	銀産出量さらに減少（過去 10 年平均 261 貫=980 キロ）
	延宝 3 年	1675	石見銀山領、代官統治へ格下げ
	享保 16 年	1731	井戸平左衛門代官着任 さつまいも植付奨励
明治	明治 2 年	1869	大森県設置（明治 3 年まで）
	明治 20 年	1887	大阪・藤田組により大森銀山永久精錬所として開始
	明治 28 年	1895	清水谷精錬所完成
大正	大正 12 年	1923	大森銀山閉山
昭和	昭和 42 年	1967	「石見銀山遺跡」県指定史跡
	昭和 44 年	1969	代官所跡、龍源寺間歩など 14 ヶ所国指定史跡
	昭和 62 年	1987	大森地区の町並みが国の重要伝統的建造物群保存地区選定

平成	平成 13 年	2001	世界遺産暫定リストに登載
	平成 14 年	2002	「銀山柵内、山城跡、港湾」国史跡追加指定
	平成 16 年	2004	温泉津の町並みが国の重要伝統的建造物群保存地区選定
	平成 17 年	2005	「石見銀山街道、五百羅漢、鞆ヶ浦」等国史跡追加指定
	平成 18 年	2006	世界遺産登録推薦書をユネスコに提出
	平成 18 年	2006	イコモスによる現地調査（10月）
	平成 19 年	2007	世界遺産委員会において世界遺産一覧表記載の可否決定(7月頃)

(2) 石見銀山遺跡の評価

石見銀山遺跡は平成 17 年 9 月、世界遺産登録に向け政府がユネスコに対し、推薦決定が行われた。18 年 1 月 4 日には石見銀山遺跡の世界遺産登録推薦書がユネスコに正式に受理された。推薦決定により平成 19 年度には世界遺産登録が確実視されている。そうした中、地元大田市では石見銀山遺跡の世界遺産登録後に向け期待感が高まりつつある。しかしながら、地域振興の起爆剤としての期待感が高まる一方で、準備に向けた大変な作業や訪れる観光客による地域住民の生活が脅かされるといった不安感も強まりつつある。

石見銀山は国内にある他の世界遺産登録とは異なり、産業遺産としての登録を目指しており、ユネスコで認められればアジアでは初の産業遺産となる。日本には昔から産業に関しての歴史があるが、特に金属文化の歴史について言えば、この島根の地、出雲地方から始まったといっても過言ではない。

奥出雲町の「たたら」、さらに古くは出雲大社境内内の銅の精錬遺跡、そしてその延長上にあるであろう荒神谷遺跡の 358 本の銅剣、隣の加茂岩倉遺跡の 33 個の銅鐸に見られるごとく島根県はわが国の金属文化発祥の地とも言え、伝統ある産業地域ということが出来る。日本の産業遺産というより島根県の石見地方から産業遺産が登録されることは大変意義深いことと言える。

石見銀山は最盛期には世界の三分の一を占めたといわれる日本銀の、さらのその大半を産出したとされる。石見銀山の銀により東アジアの経済の仕組みまで変えてしまうほどの影響があったといわれている。中国より東方に黄金の国が存在し、豊かな民が暮らしていると伝えられたことからキリスト教、中でもイエズス会による宗教活動の伝播にいたるまで世界の経済、宗教、文化にまで多大な影響を及ぼした点として存在感は大きい。

金平糖、如雨露、襦袢・・・いずれも *confeito*、*gorro*、*gibao* と標記するポルトガル語を起源としているが、なぜ、こうしたポルトガル語が日本語として帰化したかについては教育現場では深く教えることは無い。歴史の教科書で学ぶ多くは、1543 年（天文 12 年）種子島に漂着したイエズス会の宗教伝道者と鉄砲の伝来、それに続く長崎でのポルトガルとの交易、さらにその延長

上のキリスト弾圧と鎖国政策への道のりである。鉄砲と宗教の伝来がその後の日本の歴史に与えた影響については多くを学ぶが、なぜそのような事象に結びついたについては殆ど学ばない。

石見銀山の銀を求めて西洋人が日本に向かう途中にポルトガル人の漂着があったと推察され、もし石見銀山の存在がなければポルトガル人の漂着もなかったであろう。その後の歴史的展開は石見銀山の存在が必要条件であり、今回の世界遺産登録を契機として大いに認識が深まるであろうことを期待している。そのような役割を演じるのは「産学官」の「学」の部分である。石見銀山遺跡が世界遺産となることについては「産」と「官」の動きは始めている。これを機会に「産学官」の連携がいっそう進み、より効果の高い産業遺産となることを期待したい。

さらに石見銀山が鉱山町としてのみならず、それを運び出す港湾設備、いくつもの陸路、街道がひっそりと当時のままとを偲ばせて佇んでいるのは文化的に見ても価値が高いといわれるゆえんである。残されている小道や石垣などから推察すると、今は朽ち果ててしまった神社仏閣、採掘に携わる人々やそれをサポートするさまざまな人々が住んでいたであろう町並みが髣髴とイメージされ、そうした当時の町並みがそのまま残されている点でも貴重な文化財である。これらの残された遺跡群からは鉱山町として栄えていた時代の街並みはもちろん、当時の経済システムが理解できる点としても評価が高い。

一方、環境面からも評価されているところがある。鉱山そのものが現在は静かな森の中でひっそりとまるで冬眠してしまっているかのように静かに時間の中で流れている。当時は 20 万人ともいわれるたくさんの人々が大森地区を中心とした地域に生活していたとされているが、当時の 20 万人と言えば世界でも有数の人口が密集した都会地である。これほど大規模な鉱山町であったにもかかわらず、そして開発以降 500 年の悠久のときを経た今でも当時を髣髴とさせる町並みが残っているのは何故だろうか。

一つには鉱脈があるところを人力により掘り出し、掘り尽くすと次の鉱脈に向けまた掘り進むという、現在の効率第一主義の採掘方法では全く間尺に合わない形で開発が進められていった。鎌倉・室町時代から始まって江戸、明治、大正の各期にいたるまで綿々と開発が進められていった点が挙げられる。そしてもう一つはその間に急激な開発とか機械化が進められたわけではなく、悠久の時間が過ぎ去っていったなかで、最期はゆっくりと幕を引いていった点が挙げられる。つまり急激な開発で急激に幕引きされたわけではなく、緩やかに幕引かれたことで自然な形で終焉を迎えたことが当時のそのままの姿を今日にまで伝えることになった点は大いに評価されるべきことといえる。

3. 世界遺産登録の可能性

(1) 世界遺産登録への道のり

世界遺産条約の契約国は、5～10年以内に世界遺産に登録するために推薦候補物件について記した暫定リストを世界遺産委員会に提出することになっている。現在（平成18年7月）、日本の暫定リストには

- 古都鎌倉の寺院・神社ほか
- 彦根城
- 平泉の文化遺産
- 石見銀山遺跡

の4件が記載されている。

暫定リスト入りした物件が世界遺産登録されるためには、文化遺産の場合、まずコア・ゾーン（世界遺産の資産となる区域）が国の有形文化財の指定を受けるなど、日本の例で言えば文化財保護法等の国内法で保護されることが必要である。さらにそのゾーンのバッファ・ゾーン（周辺環境を保護する緩衝地帯）を設定し、法令などに基づいた保全措置を講ずることが前提となっている。

その上で資産の価値、真正性を証明する内容を盛り込んだ世界遺産登録のための推薦書を作成し、ユネスコ世界遺産センターに提出し、推薦書の内容やI COMOS（＝国際記念物遺跡会議）による現地調査などの審査を経て登録の是非が決定されることとなっている。なお、自然遺産についてはIUCN（＝国際自然保護連合）の専門機関に現地調査の実施を依頼することになっている。

世界遺産委員会は、I COMOS、IUCNの報告に基づき、世界遺産リストへの登録の可否を決定することとなっている。石見銀山遺跡は、1996年から周辺の環境整備、環境保全を進め、2005年5月には遺跡全域が島根県により史跡に指定され、7月には文化審議会文化財分科会で世界遺産への推薦が了承された。順調に行けば2007年7月ごろ開催される世界遺産委員会で決定される予定である。

(2) 石見銀山遺跡の世界遺産登録の可能性

世界遺産には文化遺産と自然遺産の二つの登録基準がある。石見銀山遺跡は文化遺産としての登録手続となるが、ユネスコが定めた文化遺産の登録基準によれば

- ① 人間の創造的才能を現す傑作であること
- ② ある期間、あるいは世界のある文化圏において、建築物、技術、記念碑、都市計画、景観設計の発展において人類の価値の重要な交流を示していること
- ③ 現存する、あるいは既に消滅してしまった文化的伝統や文明に関する独特な、あるいは

稀な証拠を示していること

- ④ 人類の歴史の重要な段階を物語る建築様式、あるいは建築的または技術的な集合体、あるいは景観に関する優れた見本であること
- ⑤ ある文化（または複数の文化）を特徴づけるような人類の伝統的集落や土地利用の優れた例であること。特に抗しきれない歴史の流れによってその存在が危うくなっている場合
- ⑥ 顕著で普遍的な価値をもつ出来事、生きた伝統、思想、信仰、芸術的作品、あるいは文学的作品と直接または実質的関連があること（極めて例外的な場合で、かつ他の基準と関連している場合のみ適用）

以上を石見銀山遺跡に当てはめると次ページのような評価となり、十分に世界遺産登録の基準に合致することがわかる。

参考までに自然遺産としての登録基準としては次のとおりである。

- ① 生命進化の記録、地形形成において進行しつつある重要な地質学的過程、あるいは重要な地形学的、あるいは自然地理学的特徴を含む、地球の歴史の重要な段階を代表する顕著な例であること
- ② 陸上、淡水域、沿岸、海洋生態系、動・植物群集の進化や発展において、進行しつつある重要な生態学的・生物学的過程を代表する顕著な例であること
- ③ 類例を見ない自然美および美的要素を持った優れた自然現象、あるいは地域を含むこと
- ④ 学術上、あるいは保全上の観点から見て、顕著で普遍的な価値をもつ、絶滅の恐れがある種を含む、生物の多様性の野生状態における保全にとって、最も重要な自然の生息・生育地を含むこと

文化遺産と自然遺産の登録基準を対比してみると、一層文化遺産としての価値が分かる。

項目	評価	コメント
①	○	灰吹法は当時としては最先端のハイテク。産業遺産としての重要な論拠
②	○	当時全世界の銀産出 2/3 が石見。世界地図にも「iwami」と記載されている
③	○	大規模な商業開発がされず、当時の姿がそのまま自然に埋もれて残っている
④	○	縦横縦横無尽の採掘跡並びに採掘現場での精錬跡は稀有。積出港との連携も良
⑤	○	往時の段階的開発跡と産業を精神的に支えた神社仏閣（跡）との共存
⑥	○	銀を軸として中国、東南アジア、ヨーロッパへと伝播した痕跡は類例を見ない



フェルナン・ヴァス・ドラード（ポルトガル人）作の日本図



灰吹法跡（復元模型）

第2章 世界遺産と地域振興

1. 世界遺産に指定された国内事例

(1) 世界遺産と観光客数

石見銀山協働会議の全体会議第1回資料によれば、石見銀山遺跡に先かぎて世界遺産に登録された他地域の世界遺産登録前平均（登録前5年間）および登録後平均（登録翌年からH14年まで）の観光客入込み数は下表の通りである。

世界遺産名 (略名)	登録年	入込み客数 (千人)	登録前訪問者数 の伸び率 (%)	登録後の平均 伸び率 (%)
屋久島	H5.12	340	21.6	-0.3
白川郷	H7.12	771	3.9	10.9
日光	H11.12	5,737	-3.4	2.1
琉球グスク	H5.12	5,031	6.3	3.3

《日本国内の世界遺産の入込み客数：石見銀山協働会議全体会議資料より再作成》

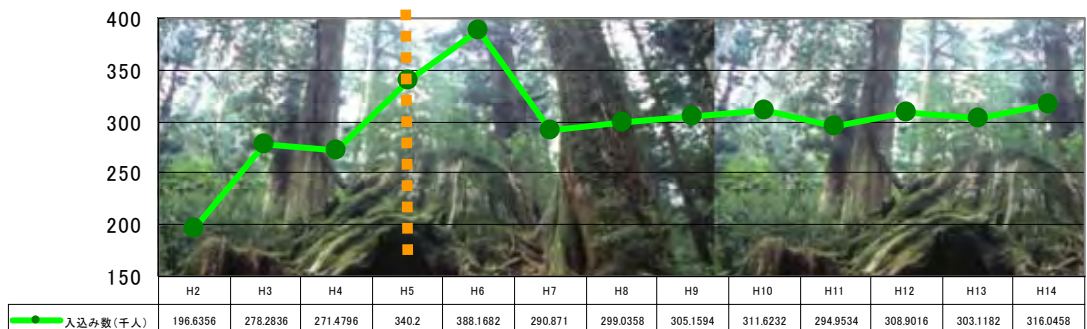
屋久島および白川郷が数十万人規模の観光客入込み数に対し、日光および琉球グスクは5百万人を超える客数の入込みのある世界遺産である。「琉球王国のグスク及び関連遺跡群」は人口の集積している東京（首都圏）からは時間距離もある中で、相当の入込み客数を確保していることが分かる。このことは時間距離や費用といった観点より、モニュメント性、認知度、世界遺産そのもの以上に関連する観光施設の充実などといったものが大きく作用しているものと考えられる。

「日光の社寺」は東京（首都圏＝巨大人口集積地）から近いという点は他の世界遺産と大きく異なるが、ここは日本人のみならず多くの海外観光客も訪れている。モニュメント性はもちろん、日本人にとって歴史や美術の教科書の題材になるように存在の認知が徹底していること、もちろん外国の観光客にとってもガイドブックに取り上げられるなど認知度が高さから、この表のような数値となって現れていると考えられる。

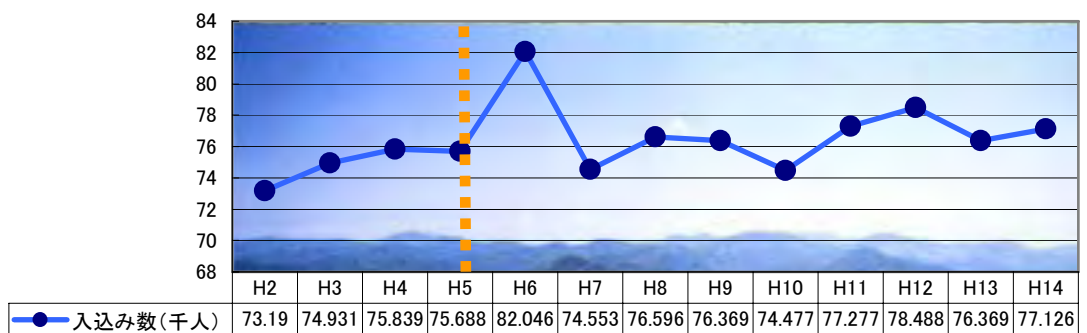
一方、島根県川本総務事務所が平成16年10月から11月にかけて行った駐車場の利用状況等を基にした推計調査によれば、平成16年度の大森町の町並みへの入り込み客数は266千人と推計されている（島根県観光動態調査によれば平成16年度の石見銀山遺跡への観光客の入込み数は318千人となっている）。

上記の資料から言えることは、国内の世界遺産登録各地と比べても現状では石見銀山遺跡は大規模な観光地ではない。規模的には屋久島や白川郷クラスもしくは最小クラスといえる。しかしながら、登録前訪問者数および登録後の平均伸び率は規模の大小、人口の大規模集積地からの距離の遠近によらない点には注目しておきたい。

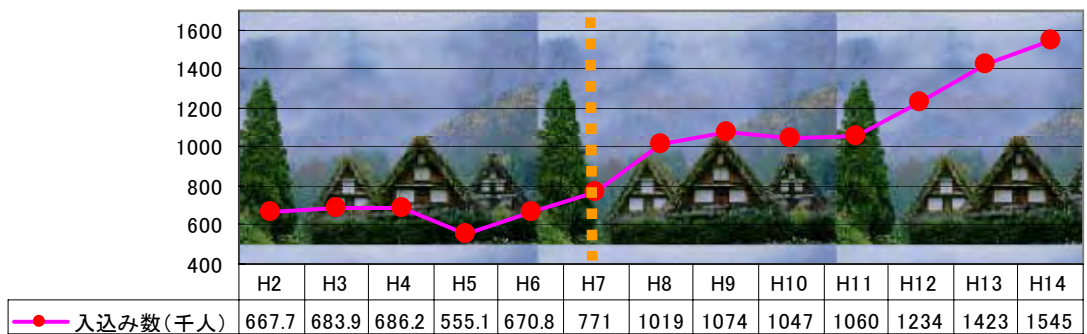
屋久島(平成5年世界遺産登録)への入込み数



白神山地(平成5年世界遺産登録)への入込み数



白川郷(平成7年世界遺産登録)への入込み数



(いずれも縦のオレンジ破線が世界遺産に登録された年次を示す。石見銀山協働会議全体会資料から作成)

(2)屋久島の事例

観光客の入込み数や都会地からの交通アクセス面からも石見銀山と似通った条件にあるのが「屋久島」といえる。世界遺産としての「屋久島」を簡単に紹介すると

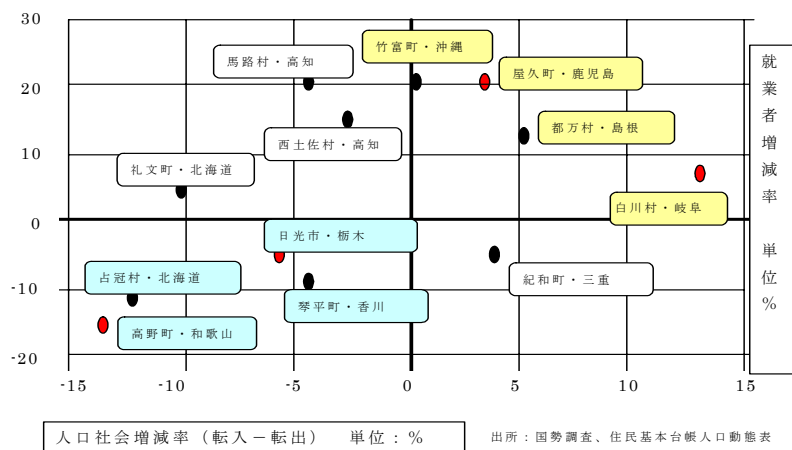
- ① 世界遺産としての「売り」は豊かな自然が残っていること。気候が亜熱帯から亜寒帯まで分布し日本の植物の 70%が見られる。さらに固有種に至っては 40 種と日本一多い存在で東洋のガラパゴスとも呼ばれる。特に縄文杉、屋久杉など樹齢の長い杉は有名である。
- ② 世界遺産のシンボリック的存在である縄文杉を訪問した観光客は昭和 63 年に 63,516 人であったのが平成 12 年に 155,261 人と世界遺産登録後 13 年で 2.4 倍に増えた（屋久島山岳利用対策協議会調べ）。

屋久島は動植物愛好者や登山（トレッキング）愛好者にとっては垂涎の観光地ということが出来る。石見銀山遺跡も「産業遺産」としての意義や評価を感じる人々や残された自然風景をゆっくり楽しもうとする人々にとっては非常に価値ある世界遺産といえる。一部の愛好者にとって評価の高い遺跡であっても万民向けの観光施設とはならないだろう。そのような面で両者とも似たような存在といえる。

2. 世界遺産と地域おこし

(1)世界遺産登録による地域活性化

1つの興味深いデータがある。下の表は 95 年～2000 年の増減率を示した表で、横軸は社会増減率（2000 年の人口社会増減率（転入－転入）÷95 年人口）、縦軸には就業者（商業＋サービス業）の増減率をそれぞれ%で自治体の位置を示したものである。この表から読み取れるとおり、大都市からの遠近、離島か本土、対象オブジェクトのインパクト性についての差異はあまり感じられない。



世界遺産登録された地域を4箇所赤色でプロットしてみた。興味深いことは既に世界遺産として登録された屋久町（屋久島；1993年）、白川村（白川郷・五箇の合掌造り集落；1995年）がブラスのエリアにプロットされていることに対し、日光市（日光の社寺；1999年登録）や高野町（紀伊山地の霊場と参詣道；2004年）が対照的にマイナスプロットエリアに位置していることは注目に値する。上記のデータが95年から2000年というデータと世界遺産に登録された年の関係で見ると、サンプル数は少ないものの世界遺産登録という契機によって地域の人口動態にはあまり影響を与えていないようである。

就業者と人口の増減率の二次元的な観点からのみで全てを論じるわけには行かないが、表の第一象限にプロットされる地域に共通する特色としては、

第一に地域の風土に根ざした住み方や食など独自の生活文化があり

第二にそれを個人客に分かりやすく体験してもらう工夫があること

第三にその結果としてゆっくり滞在し、時間を消費するリピーターが増えていることである（出所：「実測日本の経済」藻谷浩介、日本政策投資銀行地域企画部参事役）。この分析は今後の石見銀山遺跡を中心とした地域活性化の方向付けには大いに参考となるであろう。

以上のまとめとして、観光客の訪問誘因は目的地が大消費地（東京・名古屋・大阪圏内）からの遠近によらないこと、訪問目的はその地の生活風土の触れること、そして、その地をゆっくりと楽しむことということに要約される。

(2)交通アクセスと地域おこし

石見銀山遺跡が地元の経済活性化の起爆剤としての期待は相当高いものがある。一方で、公共交通網の未整備、とりわけ道路と鉄道の整備の遅れが指摘され、その未整備による地域不活性化の懸念も大きい。全国の観光関係者の間には「観光地の盛衰は、一に景気、二に交通アクセス、三に地域資源の良否で決まる」との通説があるとされている。確かに近隣の観光施設で全国区レベル、あるいは全世界規模でのイベントによる観光客の動向に大きく左右されることは事実である。

	草津温泉	伊香保温泉	水上温泉
最寄高速道路 IC からの距離	54 k m	10 k m	3 k m
最寄新幹線駅からの距離	44 k m	26 k m	10 k m
最寄在来線駅からの距離	13 k m	9 k m	1 k m

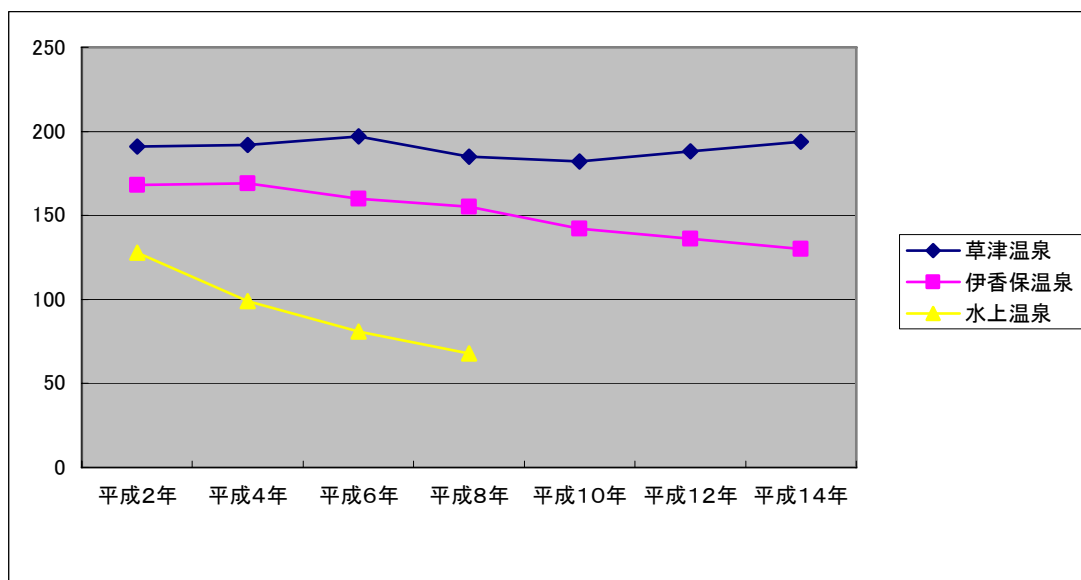
《出所：日本政策投資銀行》

交通が至便で素材がよければ観光地は無条件で反映することとなるが、この定説は正しいであろうか。ここに、交通アクセスでは決まらない集客力を数字で示したデータがある（日本政策投

資銀行)。ターゲットは温泉地であり、世界遺産に至るまでの交通アクセスではないが、交通アクセスと集客量との関連性を調査したもので、石見銀山の交通問題を考える上では参考になるものと思われる。

上記のデータはいずれも群馬県内の有名温泉地で交通アクセスの観点から立地性についての調査である。データから見る限り草津温泉は、伊香保温泉、水上温泉のいずれより最大のマーケットである東京からのアクセス面では不利であるといえる。

一方、上記3温泉の宿泊客数は草津温泉が横ばいしないし微増、伊香保温泉は減少傾向に歯止めがかからない。一方、水上温泉のほうは交通アクセス上の点では最も優位な位置にあるにもかかわらず、平成2年から平成8年といった短期間だけの数値に限って見れば半減していることが分かる。



(単位：万人) 《出所：日本観光協会》

3地域とも主要マーケットである首都圏からの集客を主なターゲットと捉えれば、訪問しようとする動機やチャンスは同等と考えられる。温泉地の好みは、それぞれまちまちであろうが前掲の交通アクセスというハンディを押しつけて草津温泉が善戦している姿が浮かび上がってくる。群馬県内という首都圏の経済環境という面では同条件であっても、一方で交通アクセスと言う観点からは不利な条件を抱えながら善戦している地域（勝ち組＝草津温泉）と悪戦苦闘している地域（負け組＝水上温泉）の二面性が浮かび上がってくる。つまり、ここで強調すべきことはその他の条件を所与の条件として、交通アクセスという観点のみでは勝ち組、負け組は論じられないということである。むしろ、温泉そのものの持っている魅力、さらには受け皿となっている地域がいかに経営努力を行ってきたかということが問われているのではなかろうか。

(3)石見銀山遺跡と地域おこし

石見銀山遺跡の世界遺産登録という千載一遇のチャンスに乗り遅れまいとして地域活性化の期待は高まる一方である。一方で交通アクセスや観光客に訴えるモニュメントの不明確さなど従来型の観光施設という観点から、このままの姿でよいであろうかと不安視する声もある。しかしながら、前項の(1)、(2)で見てきたように大消費者の居住地からの遠近や交通アクセスの問題だけで地域活性化がなされているわけではない。

世界遺産に登録されるにはハードルの高い内容が求められ、厳格な審査が行われることは周知のことである。石見銀山遺跡が世界遺産に登録されることは今まで見てきた通りほぼ確実な段階まできている。ということは従来型の観光地の尺度で地域振興を図ろうとすると不安視される材料はたくさんあるが、世界基準で見た遺産の価値は相当高いものがあると自信をもって訪問者に訴えることができるはずである。求められていることは石見銀山遺跡の真の価値をわかってもらえるように訪問者に正しく訴えかけ、そして理解を得ることではなかろうか。

世界遺産という格好の地域活性化の起爆剤として期待が高まる一方で、地元では観光客の呼び込みにも力が入りつつある。インフラ整備の遅れで石見銀山遺跡を訪れた観光客がガッカリするのではないかと心配する向きもあるが、インフラ整備もさることながら「世界遺産＝観光施設」という「思い込み」部分を払拭していく努力も必要である。そのようなPRや情報発信をしなければ、観光客の「美しい」とか「見事だ」というような感激を与えることなく期待値がガッカリに変わる可能性が大きい。それが日本国中に吹聴されると、せっかくの地元の期待とは裏腹の方向に進みかねない危険性も孕んでいる。

数年前、アフガニスタンで歴史的には非常に貴重なバーミヤンの仏像遺跡がイスラム原理主義のタリバンによって粉々に破壊される痛ましい事件が起きた。背景に宗教があるとはいえ、ある人にとっては貴重な財産価値のある遺跡であっても、ある人にとってはまったく意味を成さないどころか邪魔者扱いにされかねないものであったことを思い知らされた事件であった。石見銀山遺跡をみて破壊活動をする人間はいないであろうが、島根の田舎で「何にも無いただの鄙びた山の中だった」しかも「交通が不便で疲れただけだ。出雲大社がまだましだった」と言われる可能性は十分にある。

ターゲットとなる来客層の基本認識を持って対処しないと方向性を誤ることになる。「石見銀山遺跡」の意義について考察していく場合には「日光の社寺」や「法隆寺地域の仏教建造物」「古都京都の文化財」「厳島神社」のような世界遺産とは一線を画した対策が求められよう。

(4)地域性を生かした活性化

石見銀山遺跡の世界遺産登録を契機に産業振興、特に観光振興の期待は高まっているが、産業遺産の特異性から従来型の観光振興策では通用しない。今まで見てきたように石見銀山遺跡は、

そのモニュメント性がないことからいくら整備が進んだとしても一般大衆受けのする観光資源とはなりえないだろう。ただし、エリア別に見れば大森町エリア、銀山遊歩道エリア、そして温泉津重要伝統的建造物群保存地区、沖泊地区は魅力を持った地域であり整備方法如何によっては十分に観光振興の材料とはなりうる。

本稿では言及しないが、地域特産品の活用も観光振興の一つの柱である。世界遺産登録を契機に特産品の開発や料理の研究が行われているが、やはり地元に着した伝統的なものでなければ「本物志向」の中にあっては消費者にそっぽを向かれてしまいかねない。旧温泉津町西田地区には「西田葛」という 1700 年の歴史を持つ地元産品がある。昭和初期には島根県の特産品として天皇陛下へ献上されたこともあるという「西田葛」は手作り少量生産のため出回ることはほとんどないが、歴史性、地元産品という観点からは申し分の無い素材といえる。新商品の開発も必要かもしれないが、今まである材料を発展・活用していくことも重要であろう。景観や食品、いずれにしても今ある姿、今地元にあるものをどのように活用して行くかが問われている。

(5) 観光戦略の展開

石見銀山遺跡は、今までに登録された日本国内の世界遺産と異なり観光地としての知名度は低い現状にある。これまで見てきたとおり、石見銀山遺跡は長い年月を経ても変わらぬ姿を現代まで残していることに意義があり、そのスタイルを変えて観光振興を図ることは意義そのものの否定にもつながりかねない。

今まで観光地として観光を産業として生計を立ててきた値域は、大森町地区と温泉津町地区である。この両地区はこれまでの実績を踏まえ石見銀山遺跡のイメージを損なわない範囲内で「外貨稼ぎ」の産業振興が求められよう。

今までの観光戦略としての取り組みは

- ①自然発生的に発展してきたために民間の論理で進められ、統一したものはない
- ②新「大田市」合併以前は行政が分かれていたため統一的な取り組みが足りなかった
- ③観光を産業の一つとして育成させる意識が官民とも不足していた

従来型の観光地としては出遅れ感のある石見銀山遺跡を一過性のものとしないためには、次のような点も考慮すべきであろう。

- ①世界遺産登録を機に官民が統一した取り組みを行うこと
- ②そのためには「石見銀山ブランド」を打ち立てること
- ③民力が育つまで（例えば 5 年の期限付き）は官主導で仕組み、財政的裏づけを進めること

第3章 石見銀山遺跡の現状と問題点

1. 地域の現状

(1) 地域の概況

石見銀山遺跡は、東西に長い島根県のちょうど中央にある大田市に位置している。大田市は、平成17年10月1日に旧邇摩郡温泉津町および邇摩町と(旧大田市)が合併し、新大田市となった。

新大田市の新市名称をめぐっては、旧大田市・温泉津町・邇摩町にまたがって石見銀山遺跡があることから「石見銀山市」の新市名も候補になったが、旧市名をそのまま引き継ぐ形で合併した。しかし、市の名称については、合併協議において『新市の名称は、新生「大田市」とする。なお、石見銀山遺跡の世界遺産登録時において、「石見銀山市」の是非について検討する。』と確認されている。

新大田市は、面積436.11k㎡で、北方は日本海に面し、海岸の延長は46kmにおよぶ。沿岸には漁港や海水浴場などが点在する一方、南方は国立公園に指定されている三瓶山をはじめ、中国山地の山々がつらなる。市域全体は、山林原野がその殆どを覆う、中山間地域主体の地域である。

気候は、日本海側特有の気候であるものの、平野部や海岸部では積雪は少なく比較的温暖な気候になっている。

この地域は、出雲地域と石見地域の境界に位置していることから、歴史的にも双方の文化の中継点として、さらには、鎌倉時代末期に発見されたとされる石見銀山を中心に発展し、また、天領(江戸幕府直轄領)であった経緯などから、文化的にも出雲・石見とはやや性格が異なる。

◆石見銀山遺跡がある大田市の位置図



(2) 人口動態

新大田市の人口は40,703人、世帯数は14,804世帯（いずれも国勢調査・平成17年）であるが、人口動態は減少傾向にあり、自然動態（出生数－死亡者数）、社会動態（転入－転出）ともにマイナスとなっている。また、65歳以上人口が全人口に占める割合は32.8%（国勢調査・平成17年）であり、出生者数そのものも減少傾向となっており、少子化も進展している。

人口及び世帯数の推移

（単位：人・世帯）

	昭和35年	昭和40年	昭和45年	昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
総人口	66,021	58,564	51,475	49,433	49,570	49,277	47,291	44,953	42,573	40,703
年少人口 (0-14歳)	21,709	16,077	12,077	10,247	9,694	9,382	8,322	7,138	5,848	5,009
生産年齢人口 (15-64歳)	37,898	35,672	32,160	31,177	31,008	30,310	28,120	25,595	23,487	22,337
老年人口 (65歳以上)	6,414	6,815	7,238	8,009	8,868	9,585	10,824	12,220	13,238	13,357
年齢不詳	-	-	-	-	-	-	25	-	-	-
世帯数	15,889	15,387	14,900	14,923	15,258	15,368	15,224	15,069	14,986	14,804

（資料：国勢調査）

自然動態

（各年12月31日現在、単位：人）

	平成8年	平成9年	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年
出生	317	316	322	281	291	296	332	302	302	260
死亡	581	586	500	545	536	590	554	565	564	638
増減	-264	-270	-178	-264	-245	-294	-222	-263	-262	-378

（資料：大田市民課）

社会動態

（各年12月31日現在、単位：人）

	平成8年	平成9年	平成10年	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年
自然動態	-264	-270	-178	-264	-245	-294	-222	-263	-262	-378
社会動態	-213	-193	-272	-182	-159	115	-106	-166	-200	-128
計(社会増減)	-477	-463	-450	-446	-404	-179	-328	-429	-462	-506

（資料：大田市民課）

次に、石見銀山遺跡のある大森地区の人口動態をみると、昭和 35 年に 1,236 人あったこの地区の人口は、平成 17 年の国勢調査時点では 449 人にまで減少しており、減少傾向はやや緩やかになっているとはいえ減少に歯止めはかかっている。また、隣接する旧温泉津町、旧仁摩町の人口も減少が続いており、高齢化も進展している。

地区別人口の推移

(単位:人)

地区名	昭和35年	昭和40年	昭和45年	昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成2年	平成7年	平成12年	平成17年
大田	8,553	8,885	8,725	9,249	9,802	10,032	9,958	9,722	9,519	9,303
川合	3,339	2,905	2,613	2,504	2,666	2,647	2,482	2,385	2,259	2,075
池田	1,826	1,564	1,396	1,349	1,327	1,354	1,296	1,199	1,112	1,015
志学	1,648	1,418	1,251	1,213	1,114	1,037	949	846	761	687
多根	765	618	534	473	458	425	354	314	293	274
山口	904	751	627	575	558	506	433	386	376	364
富山	1,767	1,405	1,221	1,096	1,026	980	905	849	774	705
朝山	1,173	972	843	795	797	780	731	704	660	625
波根	2,532	2,274	2,031	2,133	2,038	2,079	1,905	1,774	1,630	1,560
久手	5,753	5,038	4,561	4,915	5,282	5,311	5,154	5,062	4,768	4,598
鳥井	2,108	1,824	1,649	1,219	1,303	1,330	1,357	1,358	1,355	1,334
長久	2,355	2,209	2,093	2,241	2,367	2,718	2,777	2,746	2,674	2,785
静間	2,482	2,202	1,969	1,901	1,946	1,933	1,888	1,797	1,682	1,589
五十猛	2,974	2,705	2,205	2,080	2,006	2,016	1,932	1,815	1,682	1,570
大屋	1,091	945	794	688	655	635	574	497	491	446
久利	2,313	2,019	1,748	1,601	1,607	1,578	1,555	1,453	1,386	1,400
大森	1,236	982	830	753	655	583	547	522	472	449
水上	1,414	1,169	1,055	937	861	817	756	711	668	616
祖式	1,245	999	838	728	663	635	597	519	462	403
大代	1,733	1,438	1,209	999	895	846	772	674	585	539
旧大田市計	47,211	42,322	38,192	37,449	38,026	38,242	36,922	35,333	33,609	32,337
湯里	2,036	1,674	1,335	1,173	1,062	1,033	934	850	768	685
温泉津	3,450	2,986	2,434	2,176	2,044	1,905	1,811	1,639	1,493	1,415
井田	2,333	1,957	1,560	1,321	1,276	1,127	1,034	950	855	747
福波	2,201	1,903	1,598	1,490	1,321	1,218	1,084	1,007	937	833
旧温泉津町計	10,020	8,520	6,927	6,160	5,703	5,283	4,863	4,446	4,053	3,680
仁万	3,404	3,022	2,679	2,551	2,563	2,545	2,547	2,436	2,392	2,326
天河内						524	503	499	466	463
宅野	1,533	1,326	1,115	1,010	986	947	847	780	720	661
大国	1,858	1,559	1,261	1,171	1,217	752	714	632	580	530
馬路	1,995	1,815	1,301	1,092	1,075	984	895	827	753	706
旧仁摩町	8,790	7,722	6,356	5,824	5,841	5,752	5,506	5,174	4,911	4,686
新大田市合計	66,021	58,564	51,475	49,433	49,570	49,277	47,291	44,953	42,573	40,703

(資料:国勢調査)

(3) 産業の動向

石見銀山遺跡のある大森地区や温泉津町、仁摩町周辺における産業は、主に農林水産業が盛んである。温泉津町(西田地区)には「ヨズクハデ」とよばれる独特の稲を干す手法が伝わり、漁業においても伝統的な延縄漁やワニ漁(サメ漁)が残るなど、石見銀山遺跡周辺の地域には個性のある産業文化といったものが存在している。

そのほかにも近隣地域の地場産業として「石州瓦」や「石見焼」などの窯業が伝統的に盛んである。また、石見左官と呼ばれる専門職人が存在しており「鰻絵」などの伝統技術が伝承されている。

《農林水産業》

農業は水稻と畜産、果樹、施設園芸等による複合経営が主体である。また、畜産も盛んで県内有数の畜産基地となっている。

漁業は、沿岸、沖合域を含め恵まれた漁業環境にあり、小型機底引網・中型巻き網・一本釣延縄・小型定置網等、沿岸漁業を中心となっている。

農業粗生産額、生産農業所得の推移

(単位:百万円)

	平成11年		平成14年		平成16年	
	金額	構成比 (%)	金額	構成比 (%)	金額	構成比 (%)
米	1789	69.8	1680	68.9	1630	71.5
麦類	0	0.0	0	0.0	0	0.0
雑穀・豆類	39	1.5	40	1.6	30	1.3
いも類	39	1.5	50	2.0	40	1.8
野菜	442	17.3	410	16.8	370	16.2
果実	145	5.7	190	7.8	150	6.6
花卉	45	1.8	40	1.6	40	1.8
工芸作物	20	0.8	10	0.4	10	0.4
その他	43	1.7	20	0.8	10	0.4
耕種 計	2562	100.0	2440	100.0	2280	100.0
肉用牛	858	26.5	770	21.4	860	23.2
乳用牛	1679	51.9	2200	61.3	2220	59.8
豚	0	0.0	0	0.0	0	0.0
鶏	672	20.8	590	16.4	600	16.2
その他	29	0.9	30	0.8	30	0.8
畜産計	3238	100.0	3590	100.0	3710	100.0
農業粗生産額 計	5800		6030		5990	
生産農業所得 計	1368		1460		1430	

(資料:島根県農林水産統計)

漁獲高・漁獲量の推移

	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年
漁獲高 (千円)	3,364,274	3,387,345	3,015,925	3,035,929	2,936,642	3,178,419	2,719,695
対前年比 (%)	-	100.7	89.0	100.7	96.7	108.2	85.6
漁獲量 (t)	7,718	8,011	6,325	6,418	6,880	7,689	6,446
対前年比 (%)	-	103.8	79.0	101.5	107.2	111.8	83.8

(資料:大田市水産課)

《鉱工業》

市内には、石州瓦や家具、住宅建築関連の業種があり、石州大工や石見左官など建築技術にも伝統的な技術が継承されている。また、カマボコや干物等の水産加工品を中心に小規模ながら地域の自然の素材を活かした産業集積や医療福祉・衣服等の分野でオンリーワンを目指す事業所が見られる。そのほか、地下資源として、ゼオライト・ベントナイト・珪砂等が採掘されている。

製造業における事業所数・従業者数・出荷額の推移(従業員4人以上)

(単位:人)

		平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年
従 業 事 業 所 規 模 別	計	142	140	128	124	122	114
	4-9人	76	79	56	65	63	54
	10-19人	23	25	36	26	29	27
	20-29人	17	14	14	13	10	13
	30-99人	21	17	17	15	15	15
	100-299人	4	4	4	4	4	4
	300人以上	1	1	1	1	1	1
従業員数 (人)		3,167	2,990	2,792	2,676	2,608	2,595
出荷額 (万円)		4,368,549	4,683,006	4,318,965	4,070,159	3,968,919	4,074,960

(資料:島根県観光動態調査)

《観光》

市内には、石見銀山遺跡をはじめ、国立公園三瓶山、温泉津温泉、仁摩サンドミュージアム、三瓶自然館、小豆原埋没林、日本海（海水浴場）、温泉津温泉および三瓶温泉等、特色ある観光資源を有しており、年間 100 万人以上の観光客の入り込みがある。

観光入込み客数の推移

(単位:人)

	平成11年	平成12年	平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年
三瓶山	500,000	590,000	590,000	740,000	810,000	600,000	600,000
石見銀山	260,000	280,000	300,000	290,000	310,000	318,000	340,000
大田市海岸 (海水浴・釣り)	87,900	76,300	82,500	72,000	60,500	54,000	58,000
温泉津温泉	47,554	57,045	54,972	47,877	52,784	55,608	52,835
温泉津温泉 (海水浴・釣り)	29,192	284,040	27,656	31,503	23,168	21,013	23,312
温泉津やきもの 館・ふれあい館・ ゆうゆう館	88,634	90,618	74,161	66,961	58,313	51,828	44,835
仁摩サンド ミュージアム	40,631	53,787	33,391	26,413	27,405	27,636	31,589
仁摩町海岸 (海水浴・釣り)	13,275	13,421	14,170	12,561	8,922	8,153	12,345

(資料:島根県観光動態調査)

(1) 遺跡のあらまし

17世紀初頭には徳川幕府直轄領（天領）として支配体制を確立するため、柵を巡らして柵内と柵外が区分されていた。当時この柵内（さくのうち）と呼ばれた領域は、江戸時代の「正保二年石見国絵図（1645年）」からみると東西2.2km、南北2.5km、面積は約300haにもおよぶものであったことがうかがえる。

石見銀山遺跡には、鉱山をはじめ、多数の間歩がある部分だけでなく、掘り出した銀を精錬・加工し、運び出すといった、運搬道、港を含めた一連の機能全体が調査・保存・活用の対象となっている。

This map illustrates the Iwami-Ginzan area, highlighting various trekking routes and historic sites. The legend on the left defines the symbols used:

- Trekking Route:** Indicated by a red line.
- Important Preservation District for Groups of Historic Buildings:** Indicated by a red circle.
- The Appointed Area of a Historic Spot:** Indicated by a brown circle.
- Buffer Zone:** Indicated by a blue circle.
- Iwami-Ginzan Kaido:** Indicated by a thick red line.
- Remains:** Indicated by a black dot.

The map shows the following locations and routes:

- 仁摩町 (Nima Town):** The central location, with routes labeled 仁摩 新ヶ浦コース1 (Nima Shinkagura Course 1) and 仁摩 新ヶ浦コース2 (Nima Shinkagura Course 2).
- 仙ノ山 巖連コース (Sanno Mountain Iwatsun Course):** A route leading to the Sanno Mountain area.
- 大森町 (Oomori Town):** Located to the east of Nima Town.
- 温泉津町 (Onsenzu Town):** Located to the south of Nima Town, with routes labeled 温泉津 沖泊コース1 (Onsenzu Okuboku Course 1) and 温泉津 沖泊コース2 (Onsenzu Okuboku Course 2).
- 山崎町 (Yamazaki Town):** Located to the west of Nima Town.
- 石見環光駅 (Iwami Kankou Station):** A station located near the bottom left of the map.

The map also includes a scale bar (0 to 2km) and a north arrow. The surrounding area is labeled as 日本海 (The Sea of Japan).

– 23 –

世界遺産登録に向け、石見銀山遺跡には、コアゾーン（核心地域）とバッファゾーン（緩衝地帯）が設定されている。コアゾーンの面積は約 442ha、バッファゾーンの面積は 3,221ha（核心地域除く）と広大な面積が石見銀山遺跡としての世界遺産登録の対象地域であり、当時の原形をとどめる間歩や銀精錬の現場、数々の社寺、城跡などがそのままの形で残っている。

このように石見銀山遺跡は、銀鉱山跡と鉱山町、城跡、石見銀山街道（温泉津沖泊街道、鞆ヶ浦道）、港と港町で構成され、銀生産が盛んに行われていたことを証明する遺跡（群）と銀鉱山に関わる土地利用の総体を表す文化的背景をもち合わせているのが大きな特徴である。

また、大森の町並みおよび温泉津の港町は国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されており、江戸期の町屋の面影を残す古い町並みが保存されている。



写真：大森の町並み（伝統的建造物群保存地区）

(2) 主な銀山遺跡

石見銀山遺跡には、間歩、精錬跡、街道、港、社寺、代官所跡など多様な遺跡や建造物が残されているが、「石見銀山総合調査報告書」によれば、石見銀山遺跡は大まかに次の5つに分類されている。

《石見銀山遺跡の5つの分類》

石見銀山の主な遺跡と分類	
大分類	小分類
生産遺跡	探鉱・採鉱関連遺跡
	選鉱・製錬関連遺跡
	その他の選鉱・製錬関連遺跡
流通遺跡	港
	街道
生活遺跡	-
信仰遺跡	寺院
	神社
	石造物
支配関連遺跡	城跡
	柵列跡と番所跡
	代官所跡等
遺跡等	
大久保間歩、釜谷間歩、龍源寺間歩など	
石銀集落	
下河原吹屋跡、清水谷精錬所跡、永久稼所精錬所跡	
沖泊、鞆ヶ浦	
銀山街道	
下河原集落跡、上市場集落跡、栃畑谷集落跡、昆布山谷集落跡、石銀集落跡	
清水寺、大安寺、極楽寺など	
佐毘売山神社、豊栄神社、城上神社など	
安原備中、大久保石見守の墓、墓地など	
山吹城跡、矢筈城跡、石見城跡など	
蔵泉寺口、坂根口、栃畑口など	
大森代官所跡、休役所跡	

資料) 石見銀山遺跡総合調査報告書より

これらからは、まさに徳川幕府の時代に銀を手に入れるために必要なさまざまな機能がここに集約していたことがみてとれる。石見銀山が複合的な遺跡であり、その全体像が当時のままこの地域に残っているところに遺跡としての価値がある。

石見銀山遺跡は、戦国期、江戸期、明治期とそれぞれの時代、時代で活動の場所を変えながら生産が行われたことから、取り壊して新たに作り変えるといったことがなく、採掘・生産の現場が次々と変遷していった状況が良好な形で残っているところが特徴的である。

なお、石見銀山と同じ国指定史跡に指定されている鉱山遺跡には、黄金山産金遺跡（宮城県）、佐渡金山遺跡（新潟県）、甲斐金山遺跡（山梨県）がある。

そのほか、全国には多数の金鉱山、銀鉱山が存在している。

◆ 石見銀山（柵内）の史跡等の状況



◆大森の町並の史跡等の状況



◆城跡と港・港町等の状況



◆国内の主な鉱山



(3) 世界とのつながり

石見銀山が佐摩村にあったことから石見銀は「ソーマ（Soma）銀」と呼ばれ、海外にも数多く輸出された。中国や朝鮮半島などのアジア諸国とポルトガルやスペインなどのヨーロッパ諸国の交易に使われ世界中に流通した。石見銀山に灰吹法が伝えられ、生産量を飛躍的に伸ばすまでは、日本は銀の輸入国であったと考えられているが、このハイク精錬技術により銀の一大輸出国に転換した。

特に 17 世紀前半の石見銀は産出量が年間約 1 万貫（約 38t）と推定されており、世界の産出銀の約 3 分の 1 を占めていたといわれる日本銀の相当の部分を産出していた。

また、1568 年（永禄 11 年）、ポルトガル人の地図製作者フェルナン・ヴァス・ドラードが、インドのゴアで作った「日本図」には、

石見の位置にポルトガル語で「R・AS
MINAS DA PRATA(ミナス ダ プラタ)」
＝銀鉱山王国＝と記載されており既
に当時石見銀山が認識されていた
(現在この地図は、スペイン・マド
リードのアルバ公爵家が所蔵)。

さらに、日本にキリスト教を伝えたスペインのフランシスコ・ザビエルは、インドのゴアからポルトガル

16世紀後半 スペイン・ポルトガルの交易



のシモン・ロドリーゲス神父にあてた手紙に「カスチリア人はこの島々（日本）をプラタレアス（銀）諸島と呼んでいる。（中略）このプラタレアス（銀）諸島の外に、銀のある島は発見されていない。」（『1552年4月8日付けゴア発パレード／シモン・ロドリーゲス宛書翰』）とあり、当時日本が世界における銀の一大産地であったと推察されている。

逆に、海外諸国の文献の中にも石見銀山のことが記され、「福建の唐人が銀を買うために日本へ行き、風に吹き流されて朝鮮にいたった」（『朝鮮中宗実録』）との記述や「インドのカンパヤの薬品やマラバル・南洋諸島の香料を積んでシナに向かう船は（中略）のちに日本銀を積むのが主要な目的となったため、ナウ・ダス・プラタス（銀船）と呼ばれるにいたった」（『フレデリチ航海記』）と書かれているなど、石見銀をはじめとする日本の銀が世界中に流通していた様子がうかがえる。

今後とも国内外から当時の石見銀山がいかに魅力を有していたかを明かす様々な物証が発見されるものと期待される。

（4）主な文化財

石見銀山遺跡は14ヶ所が国指定文化財であり、龍源寺間歩や大久保間歩をはじめ、大久保石見守墓所などが指定を受けている。

また、「辻が花染丁字文胴服」、「大田市大森銀山伝統的建造物保存地区」、「熊谷家住宅」の3件が国指定文化財となっている。

そのほかにも、県指定文化財32件、市（および旧仁摩町）指定文化財28件があり、おびただしい文化財が存在している。

今後とも、発掘調査が進むにつれて文化財の数も増加していくものと考えられる。

国指定文化財

名 称	指 定 年 月	所有者・管理者
石見銀山遺跡(14ヶ所)	昭和44.4.14	同和鉱業(株)
・大久保間歩		大田市他
・釜屋間歩		
・本間歩		
・龍源寺間歩		
・新横相間歩		
・福神山間歩		
・新切間歩		
・伝安原備中霊所		
・安原備中墓		
・天正在銘宝篋印塔基壇		
・山吹城跡		
・佐毘売山神社		
・大久保石見守墓所		
・大森代官所跡		
辻が花染丁字文胴服	昭和43.4.25	清水寺
大田市大森銀山伝統的建造物保存地区	昭和62.12.5	大田市
熊谷家住宅	平成10.5.1	熊谷ヒサ子

(5) 交通アクセス・宿泊施設等

東京・大阪方面からの空路（出雲空港経由）および鉄道（JR 伯備線経由）によるアクセス、また、京阪神、松江・出雲、広島（九州）各方面からの車でのアクセスは、それぞれ下記の通りとなっている。

石見銀山遺跡が位置する地域は、島根県内においても都市部からの交通の便が良いとはいえない地域であり、アクセス時間の短縮が望まれるところである。

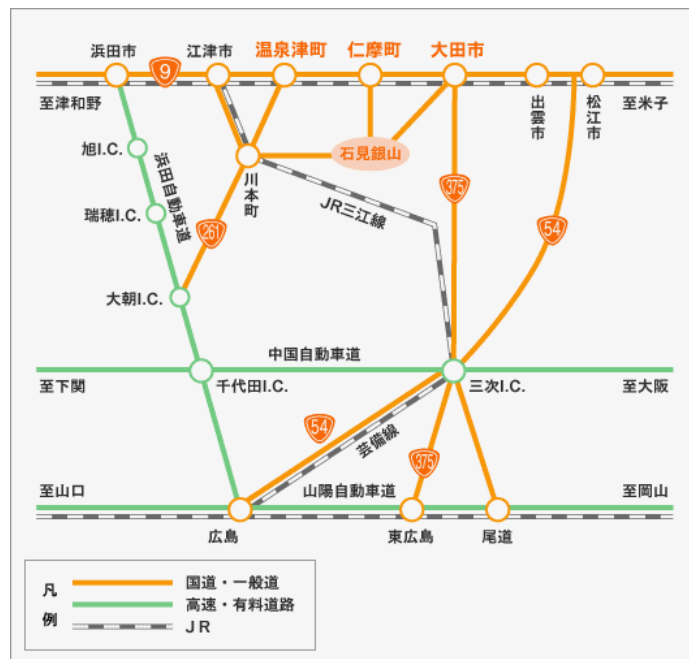
平成 18 年度現在、高規格道路[山陰道の一部]として仁摩－温泉津道路の整備が進められているほか、今年度中に山陰道斐川 IC-出雲西 IC 間の着工が予定されている。さらに多伎-朝山道路についても今年度中に調査・設計着手が予定されており、出雲市-江津市を結ぶ山陰道として早期整備が期待されている。

また、山陽方面からの交通アクセスについても尾道-松江線（尾道 JCT から三刀屋木次 I.C 間）の早期整備が待たれるところである。

石見銀山遺跡への交通アクセス

交通手段とアクセス経路	【特記事項】
■飛行機で 羽田空港・伊丹空港・福岡空港 ～ 出雲空港 ～（連絡バス）～ JR出雲市駅 ～ JR大田市駅 ～ 路線バス（大森・大家線、川本線）～ 石見銀山	
■列車で 新大阪駅 ～（新幹線岡山経由）～（JR伯備線経由）～ JR出雲市駅 ～ JR大田市駅 ～ 路線バス（大森・大家線、川本線）～ 石見銀山	
■京阪神方面から 基本ルート 米子自動車道経由 ～ 山陰自動車道(宍道IC) ～ 国道9号線 ～（主）仁摩瑞穂線 ～ 石見銀山	・ 最短ルートです。
■京阪神方面から サブルート 中国縦貫自動車道経由(三次IC) ～ 国道54号線 ～ (一)邑智赤来線 ～ 国道375号線 ～（主）大田桜江線 ～ 石見銀山	・ 国道54号線の途中に道の駅「赤来高原」があります。 ・ 国道375号線に未改良区間があります。道幅が狭くカーブが続くので、特に大型車両は注意が必要です。 ・ 冬季は積雪の多い地域なので注意が必要です。
■松江・出雲方面から サブルート[大田市街地経由] 山陰自動車道(宍道IC) ～ 国道9号線 ～ 国道375号線 ～（主）大田桜江線～ 石見銀山	・ 最短ルートです。 ・ 大田市街地を経由するため注意が必要です。 ・ 大田桜江線の一部に未改良区間がありますが、通行にはあまり支障はありません。
■広島(九州)方面から 基本ルート 中国縦貫自動車道経由 ～ 浜田自動車道(浜田Jct経由) ～ 山陰道江津道路(江津IC)～ 国道9号線 ～（主）仁摩瑞穂線 ～ 石見銀山	・ 最短ルートです。
■広島(九州)方面から サブルート[川本町街地経由] 中国縦貫自動車道経由 ～ 浜田自動車道(大朝IC) ～ 国道261号線 ～（主）川本波多線 ～（主）仁摩瑞穂線 ～ 石見銀山	・ 途中に道の駅「瑞穂」があります。 ・ 川本町の街中を通過するので普通乗用車、大型車両ともに注意が必要です。 ・ 街中の道幅が狭いため大型観光バスの通行は厳しい状況です。 ・ 冬季は積雪の多い地域なので注意が必要です。
■益田方面から 基本ルート 国道9号 ～（主）仁摩瑞穂線 ～ 石見銀山	

資料：大田市観光課ホームページ（<http://www.iwamigin.jp/ohda/kankou/access/index.html>）から



石見銀山遺跡に至近の宿泊施設（車でのアクセス時間 30 分程度以内）としては、大田市内の温泉津温泉の旅館、三瓶温泉の旅館があげられるほか、中心市街にいくつかのホテルも立地している。

また、出雲地域には、玉造温泉があるほか、石見地域にも有福温泉、美又温泉、旭温泉などが点在しており、いずれも石見銀山遺跡へのアクセス時間は1時間から1時間半程度となっている。

石見銀山遺跡周辺の宿泊施設(大田市内)

種別	名称	所在地	室数	定員
旅	ひろた屋旅館	大森町	9	28
旅	はし本旅館	大田町	11	50
旅	ときわ荘	同上	10	22
旅	城山温泉旅館	同上	8	20
旅	鳴滝温泉旅館	同上	5	12
H	大田市農林福祉会館(バストラル)	同上	6	24
H	ブラザホテルさんべ	同上	17	47
H	県立男女共同参画センター	同上	15	39
公	「あすてらす」宿泊フロア	同上		
H	スカイホテル大田別館	同上	94	96
旅	湯元旅館	三瓶町	8	24
旅	三瓶観光ホテル	同上	30	117
公	国民宿舎さんべ荘	同上	36	117
公	さひめ野(旧かんぼの宿三瓶)	同上	36	130
他	ペンション モンテ・ローザ(西の原2)	同上	5	14
他	池の原ペンション(西の原3)	同上	7	23
旅	小屋原温泉熊谷旅館	同上	5	20
旅	竹乃家旅館(西の原1)	同上	6	17
旅	池田ラジウム鉱泉 方泉閣	同上	6	20
旅	泉弘坊温泉	川合町	6	20
旅	武田旅館	波根町	6	33
旅	石原旅館	同上	9	35
旅	水明館	同上	9	40
旅	金子旅館	同上	7	40
旅	朝日旅館	久手町	5	20

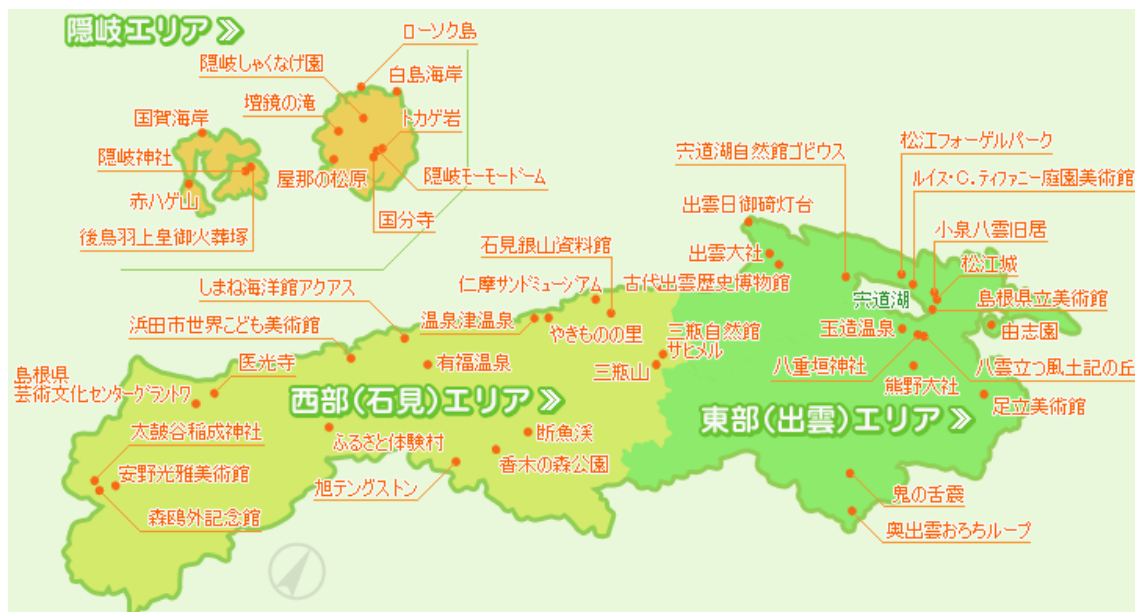
種別	名称	所在地	室数	定員
旅	旅館 ますや	温泉津町	10	41
旅	旅館 のがわや	同上	10	51
旅	旅の宿 輝雲荘(きうんそう)	同上	14	54
旅	旅館 吉田屋	同上	11	45
旅	旅館 後楽	同上	9	40
旅	なかのや旅館	同上	8	25
旅	旅館 廣島屋	同上	7	17
旅	円満風呂 山県屋	同上	8	30
旅	さわのや旅館	同上	8	20
旅	まるき旅館	同上	9	25
旅	もりもと旅館	同上	7	25
旅	旅館 高見屋	同上	5	15
旅	お食事・お宿 あさぎ屋	同上	7	25
旅	宿坊清水大師	同上	5	15
旅	湯治の宿 長命館	同上	13	50
公	福光会館	同上	8	30
民	みんなの民宿 川本屋	同上	4	20

旅	小鉄屋旅館	仁摩町	9	35
他	ユースホステル 城福寺	同上	5	15
旅	湯迫温泉旅館	同上	10	40
民	民宿 あめがたや (営業期間7月10日～9月末迄)	同上	2	10
民	民宿 木屋	同上	10	30

旅…旅館、H…ホテル、公…公共の宿、民…民宿

資料：大田市観光課

◆島根県観光マップ



資料：島根県観光ナビホームページより (<http://www.kankou.pref.shimane.jp/pickup/spot/index.html>)



写真：大森町にある地元旅館

石見銀山遺跡から連続的、带状に広がる 2.8 km の大森の町並みは、国の伝統的建造物保存地区に選定されており、昔ながらの町屋の雰囲気大切に保存され、統一された雰囲気での整備が進められている。

現在、この通りには、観光客向けの雑貨店や土産物店、飲食店などが点在しているが、年間 40-50 万人程度が見込まれる観光地にしては商店数が少ない。

また、一般の民家には空き家が目立っているほか、民家や地役人屋敷などが密集して立ち並ん

そのほか、石見銀山（大田市）に関連がある地域資源（特に観光・文化に関連のあるもの）についても、多様で個性的なものが少なくないことから活用していく工夫が求められる。

3. 石見銀山の問題点

(1) わかりにくい遺跡

石見銀山遺跡を訪れる来訪者の視点から見た問題点としてまずあげられるのが、この遺跡がわかりづらいということである。

広大な遺跡のほとんどが竹林、草木に覆われて眠っていることから、見た目だけではこの遺跡の全体像や歴史的、文化的背景の全容を理解することはできない。

従って、いかにこの遺跡の価値を限られた時間の中で来訪者に理解してもらうかが重要である。

(2) 受入容量

石見銀山遺跡のある大森町の人口が 400 人余りであり、ここに住む住民だけでは、押し寄せる来訪者にどこまで対処できるか不安である。

対外的には世界遺産に登録されれば知名度がさらに向上し、来訪者が増加するのは確実であろうが、来訪者の客導線を想定してみても駐車場の容量不足、周辺駐車場からのパーク・アンド・バスライドの頻度の問題、案内板やサインのわかりやすさ、トイレの場所や数、飲食店の数や容量・郷土色豊かな料理メニュー、ボランティアを含めたガイドの数・質、来訪者が満足できる個性的でバラエティに富んだ土産物の不足などが問題となろう。

小粒な石見銀山遺跡では到底全ての問題点を短時間に解決することは難しいが、来訪者の視点にたてば、先ずこのようなことが問題となる可能性が高く、ひとつ一つ解決の方向を探っていく必要がある。



写真：石見銀山公園駐車場

(3) 遺跡の保存と活用

石見銀山遺跡の発掘や調査が行われたのはほんのわずかな部分であり、今後数十年をかけて発掘・調査を行っていく必要がある。また、これらを適切に保存していくことが求められる。

世界遺産登録後もユネスコのモニタリング制度により、登録後6年ごとに保全状況を報告し、見直しの審査を受ける必要があり、「人類共通の未来に伝えていくべき価値があり、民族、国境を越えて国際的に協力して保護する必要のある文化財」という世界遺産の趣旨に沿った対応が求められる。

したがって、行政はもとより地域、来訪者といった関係者がこうした趣旨を十分理解し、共通認識を醸成していく必要がある。また、そのためには遺産を十分に活用し、いかに理解を深めるかも重要な視点である。



写真：下河原吹屋跡

(4) 住民生活

世界遺産に登録されても地域住民の生活に関し何らかの保護や規制、特権が与えられるわけではないので地域住民の生活を十分尊重することが求められる。

遺跡だけではなく、町並みや地域文化、住民のプライバシーも含め、石見銀山の魅力であるという観点に立って十分な配慮が必要である。

(5) 地域振興

世界遺産対象地域は、十分な投資が行われ整備がなされている状況にはなく、地域そのものも世界遺産登録に対応した地域づくりが十分進んでいるとはいえない。

今後は、「来訪者」の「満足」と「世界遺産石見銀山とその文化的景観」の「趣旨理解」をどうつなげていけばよいか、受け入れ態勢や遺産の適切な保存・管理、関連する文化財等の展示・収集、宿泊・飲食のもてなし方などあらゆる方向から考えておくことが重要である。

(6) 財源

石見銀山遺跡の保存と活用、周辺地域の整備・振興などについては、引き続き継続的な投資が必要になる。しかしながら、行政セクターの財政状況は非常に厳しくなっており、財源確保が大きな問題になっている。

今後は、民間も含めた財源確保策を検討していく必要があり、安定した財源づくりが求められる。

第4章 石見銀山スタイルの確立

1. 基本コンセプト

(1) 本物志向

世界遺産となった基本的なイメージは戦国時代から江戸時代にかけての銀山町の遺構、街並みであろうが、実際の大森町を形作っているのは江戸後期から昭和初期にかけての町並みとなっている。たとえ、当時を偲ばせる施設だからといって戦国時代から江戸初期の家は、現代の観光客にとってはあまりにもタイムスリップしている感がある。現実的には昭和時代までの街並みでも十分に通用するのではなかろうか。全部の建物を同一年代に固めるというより、前述を意識した年代の範囲内で様々な構造物が同居している姿が実際であろう。

〇〇江戸村、〇〇明治村のような時代をテーマとしたものや外国をテーマとしたもの、人気キャラクターをテーマとしたものなどの施設は日本各地に存在する。一方、大森町の「伝統的建造物群保存地区」におけるさまざまな建物は極自然な形で残されており、そこが他地域には見られない一番の魅力となっている。残されている建築群を手入れすることで活用が図られるなら地域の住民にとっても最良の結果となろう。

これから団塊の世代が定年退職を迎え、その余暇とお金は観光などに振り向けられるといわれている。団塊の世代の訪れる観光地としたら、大森町エリアは自らの幼少期の於ける郷愁のある風景として最高の形で残されているわけで、十分に活用すべき資源となりうる。

団塊の世代は、日本の高度成長期がもたらした豊かな世代に育った。旅行とか余暇についても従来の日本人とは比べ物にならないほど楽しみ方を知ることになってきた。第二の大航海時代と呼ばれるように日本人は世界中に出かけ、世界遺産と呼ばれる自然や人類の遺産、観光地など本物を十分に堪能してきている。一方、「映画の舞台装置」や「張りぼて」式の安物にはだんだんと目を向けなくなり、中途半端なテーマパークの多くは倒産、廃業もしくは苦戦を強いられている状況にある。団塊の世代のみならず現代の日本人の感覚は「本物志向」といってよいであろう。

(2) 熊野古道の考え方

石見銀山より3年先んじて世界遺産に指定された「紀伊山地の霊場と参詣道」においては次のような参詣道ルールが設けられている。

《紀伊山地の参詣道ルール》

1「人類遺産」をみんなで守ります

紀伊山地の自然や文化に触れ、学び、私たち共有の資産のすばらしさを、みんなの力で未来へ後世へ伝えましょう

2いにしえからの祈りの心をたどります

この道には、祈りをささげてきた多くの足跡が刻み込まれています。今なお続く人々の心

に思いを馳せながら歩きましょう。

3笑顔であいさつ、心のふれあいを深めます

であった人と声を掛け合い、また地域の人々とも交流を図りましょう。

4動植物をとらず、持ち込まず、大切にします

貴重な動植物が生息する紀伊山地では、存在するものすべてが大切な資産です。自然を愛し、守る心を持ち続けましょう。

5計画と装備を万全に、ゆとりをもって歩きます

道中では何が起こるかわかりません。中には険しい道もあるので、天候・体調・装備などを十分に考えて、無理をせずに歩きましょう。

6道からはずれないようにします

道をはずれることは危険であり、植生などを傷めることにもなります。むやみに周囲に踏み込まないようにしましょう。

7火の用心を心がけます

タバコのポイ捨てなど、ちょっとした不注意から火災は起こります。火気の取り扱いは十分注意しましょう。

8ゴミを持ち帰り、きれいな道にします

地域の人たちが古くから守り続けてきた道です。ゴミを持ち帰り、来た時より美しい道にしましょう。

以上の「紀伊山地」「祈りの心」「動植物」「植生」といった単語を「間歩」「銀山」「産業遺産」といった単語に置き換えても十分通用するほどの「ルール」といえる。どちらも自然の中に生きてきた人間の営みを遺跡なり振興の対象物と合わせて心に訴えかけようとする点では同じ目線の「世界遺産」といえる。そしてどちらとも、というより「紀伊山地の霊場と参詣道」の方が「歩いて感じ取ってもらう」には遥かに長い道のりを歩かなければならない。石見銀山のそれは、地域住民というより、今まで論じられてきた交通問題、観光客の動線という観点からは「歩いて感じ取ってもらう」という視点からアプローチして行く方がふさわしいように思える。

(3)石見銀山遺跡の基本コンセプト

石見銀山の本来的な魅力は、広大なエリア内に残された人間の生き様を再発見する探訪とも言える。そのためには、間歩そのものの整備に合わせて散策道、そしてその沿道の周辺の整備が求められる。

観光地の整備とはいえば、観光バス、マイカーなどの駐車場から目的地までの時間距離を短縮し、歩くことを出来るだけ省こうとする傾向がある。平成 18 年 3 月、国土交通省中国運輸局が交通サービスと情報提供システムの実証実験を行った結果、総じて利便性が増すという結果が出

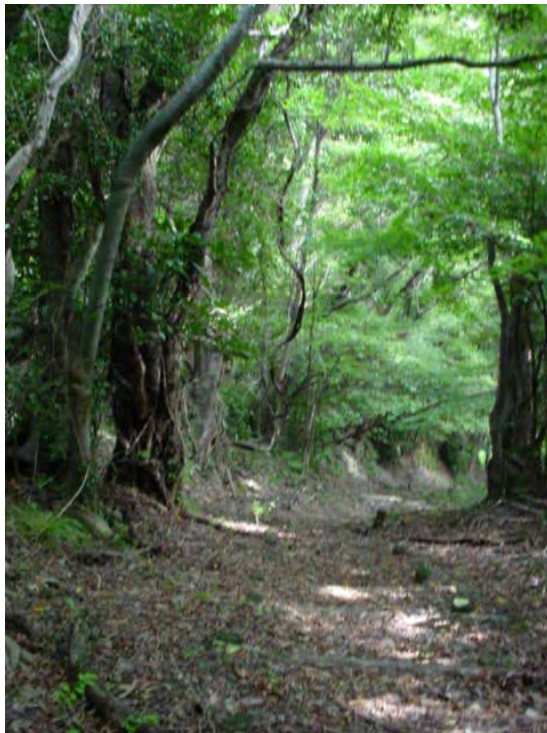
た。交通サービスとは駐車場（市民ふれあいの森公園駐車場、梅と瓦の広場駐車場、銀山公園駐車場、大森観光センター前駐車場）から龍源寺間歩駐車場までの相互間をシャトルバスのようなミニバスで巡回させる構想で、料金は百円から二百円を想定している。実験対象者の8割が本格運行されれば利用すると回答している。収容台数の少ない駐車場を鑑み、そのうえで代官所跡、龍源寺間歩などを効率的に巡回しようと思えばミニバスの巡回も必要なインフラかもしれない。

しかしながら、大森の町並みや銀山地区の谷間や川沿いに点在する間歩の跡、そこにひっそりと生活する地区住民とのふれあいは徒歩でしか味わえない喜びでもある。城上神社から龍源寺間歩に至る散策コースは、平成16年「美しい日本の歩きたくなる道500選」に選定されている。そのような意味では、交通サービスの検討に併せて「もっと歩きたくなるような道」「時間をかけて歩いても退屈させない道」として道自体の整備も求められる。

石見銀山遺跡は「自然と共生」「ゆっくり楽しむ」「従来型の観光地（＝賑わいとかみやげ物に至るまで）からの脱却」をテーマとした地域づくりが望まれる。コンセプトとしては

「自分の足で歩いて確かめる、触れて感じる世界遺産」

を石見銀山の基本的なスタイルとすることを提唱したい。



銀山街道（温泉津沖泊道）の名残をとどめる降路坂付近

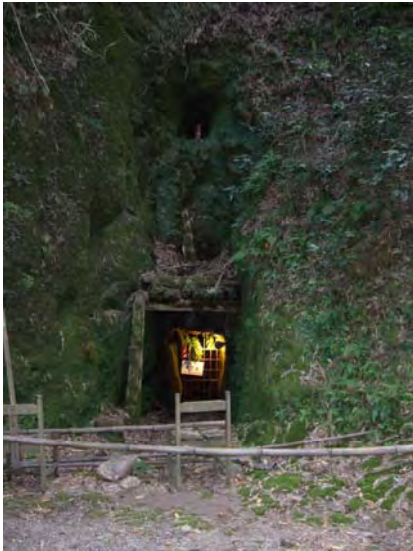
2. 遺跡整備の方向性

(1) 基本的な考え方

整備に関する基本的な方向性としては学術的な観点と観光資源としての遺跡整備が求められる。

- ① 銀山遺跡そのものの整備（主に学術的なアプローチ）
- ② 大森地区、温泉津地区など既存の観光資源と協調して整備する地域（主に観光資源として整備振興していく）

の2点に分けて考えていく必要がある。①の銀山遺跡そのものは学術的な観点からのアプローチが大きなウェイトを占めると思われるが、大久保間歩のようにある程度の保全策を講ずることによって一般観光客も立ち入ることのできるような整備も必要となる。現在のところ一般観光客が間歩の見学ができるのは龍源寺間歩の一箇所に限られているが複数箇所を回遊できるようにすること



も重要であろう。また、広大な産業遺産群を自然豊かな遊歩道を散策して回遊する観点からも複数の間歩の公開が待たれる。同様に現存する寺社仏閣やその跡など銀山関連施設も同様に複数の点を線で結び面として体感できるような整備が必要と思われる。

②の観光地としてのアプローチも整備の一方向性である。対象地域は宮ノ前地区、大森町の町並みは従来型の観光地としての整備地域と龍源寺間歩まで足を伸ばす「自分の足で歩いて確かめる、触れて感じる世界遺産」の基本コンセプトと共存させる地域である。さらには既存の温泉地としても一定の地位を得ている温泉津地区との連携も重要

となる。

いずれにしても遺跡そのものの整備にあわせて散策道の整備をはじめ周辺地域の一体的な整備が待たれる。石見銀山遺跡は価値が高かったにもかかわらず、その後大規模な開発もされず当時の姿を残している。幸いにもそのことが今回の世界遺産登録に向け大いに役立っているといえる。従って、世界遺産になるからといって今まで封印されてきた悠久の時間を変えることなく、従来の路線を堅持していくことが石見銀山遺跡のよさを守り、伝えていく最もよい方法といえる。

整備の方向性としては

- ① 残された遺跡群のうち危険性の無い遺跡はできるだけ公開すること
- ② 間歩など産業遺産は崩壊しないよう十分な保全措置を講じること
- ③ 観光や地域開発にあたっては石見銀山の魅力を最大限伝える工夫を施すこと
- ④ 地域住民と共存共栄できる地域・社会であること

⑤世界中の人類が訪れることも意識しておくこと

⑥一過性に終わらず長期持続可能な仕組、システムであること

⑦エリア内に分散された遺跡や施設をできるだけ有機的に結ぶ動線の確保に努めること

以上を踏まえて、次項で石見銀山地域全体の構造と特徴からいくつかのブロックに分けて考察していくこととする。

(2)エリアごとの方向性

①大森町エリア

大森町エリアは代官所跡から銀山公園駐車場まで。含む五百羅漢。約 0.8 キロの距離を想定している。

駐車場や交通機関の利便性からは一番多くの訪問者を受け入れる地域で、ある面では「石見銀山の顔」とも言える地域である。従って、このエリアは石見銀山遺跡の本来の姿を感じてもらふ第一歩（エントランス）的な要素と従来型の観光客相手を対象とする側面が大きい。このエリアの特徴は

- 1) 距離的には 0.8 キロと散策にはちょうど良い距離感で両端に駐車場がある
- 2) 石見銀山遺跡の概要を知る施設がある（代官所跡＝石見銀山資料館）
- 3) みやげ物店や飲食店などが集積している（一番の賑わいのあるエリア）
- 4) 町並みは「伝統的建造物群保存地区」に指定され、武家・商家の旧宅、社寺が混在している。古きよき日本の原風景を髣髴とさせてくれる。
- 5) 一方で廃屋が点在し、外見上の観点からも防犯上の点からも課題がある。

以上の特徴を勘案すれば、このエリアの方向性としては伝統的な建築物は出来るだけ当時のものに近い形で残しつつ、多くの一般観光者を満足させるようにしなければならない。一般観光者の満足は 0.8 キロの散策中に退屈感を与えないこと、他地域にない知的欲求を満たすこと、であろう。

全国の多くの観光地に見られる賑わいという面では、出遅れ感のある大森町エリアが一方ではそれが魅力であり、古きよき日本を今に残している特徴ともなっている。民家と民家の間が畑となっても大森町ではなんらの違和感も感じられない。「伝統的建造物群保存地区」として商業施設であろうが一般の民家であろうが全体が一体感のある地区とて整備しなければならない。

一方、住民のいない廃屋が点在することについては問題が残る。方向性としては

- 1) 取り壊す
 - 2) 町並みの雰囲気壊さないように（伝統的建造物群の一部として）保存する
- と問題は大きく 2 点に集約される。地区全体の賑わいを取り戻すためには取り壊す選択肢

は、技術上とか防火防犯など止むを得ない場合に限るものとし、基本的には残す方向で検討されるべきと考える。保存する場合、いずれも伝統的建造物群を意識し、家屋をそれぞれの目的にあわせて再生し今後の活用を図ることになるが

- 1) Iターン、Uターンの住民を受け入れる住居とする
- 2) ガイダンス施設として活用する。代官所跡から銀山公園駐車場までの間に点在するガイダンス施設として整備し、札所的に順番に巡ると全体が分かる、あるいは系統的でなくとも訪れたところがその人にとってのガイダンスルームとなる。
- 3) 無料の休憩所や案内所、トイレとして整備する。人力車等があれば待合所ともなる
- 4) 町の賑わいとして「みやげ物屋」「飲食店」などの商業施設として活用を図る
- 5) 構造、文化財的要素がしっかりしておれば「熊谷家」住宅のように整備して観覧の施設に供する

以上のような案を複合的に実施することも可能であろう。いずれにしてもこの大森町がもっている特徴をさらに引き出せるように活用を図ることが肝要である。一方、残す場合には財政的な裏づけが必要となってくる。行政による財源確保は現在の財政状態からすれば限定的なものとならざるを得ないと考えられるので、自主的な基盤を確立することが必要となる。

②銀山遊歩道エリア

銀山遊歩道エリアは、銀山公園駐車場（五百羅漢寺周辺を含む）から龍源寺間歩に至る銀山川周辺の約 2.3 キロの距離を想定している。

当エリアは石見銀山をより深く知ってもらうことのできる時空間で、出来るだけ自然に近い姿を提供できるエリアである。悠久とした時間の流れと散策を楽しんでもらい、ガイドによる語らいを受けながら徒歩による移動が一番効果的と考えられる。地元に住んでいる住民でも自然豊かで散策に適した遊歩道と感じられる場所で、中国自然遊歩道の一部ともなっている。自然環境を身近に感じることの出来ない都市部からの住民にとってはこの上もない魅力的な散策路であることを認識し、石見銀山遺跡の魅力を充分発揮することのできるエリアとして活用すべきであろう。





そのような観点からの街づくりのコンセプトは、「自然第一義」の中に文化的、歴史的意義を感じさせるエリアとして整備する方向が考えられる。また、当エリアは次に触れる産業遺産エリアとは違って一般観光客もターゲットとすべきエリアでもあり、2.3キロの道のりを退屈なく移動できること、また緩やかながら高低差があることを考慮し、疲れたときにはシャトルバスのような移動時の補助設備を完備できる姿が望ましい。

一方、自然豊かな散策路であるがゆえに自然災害や長距離エリアにも配慮した整備も望まれる。すなわち、

- 1) 蛇などの爬虫類や蚊など昆虫類対策
- 2) 呼び出しシステム→緊急時や移動補助のバスやタクシー呼び出し

以上は一般観光客も入り込むことを十分に想定した対策が必要となる。



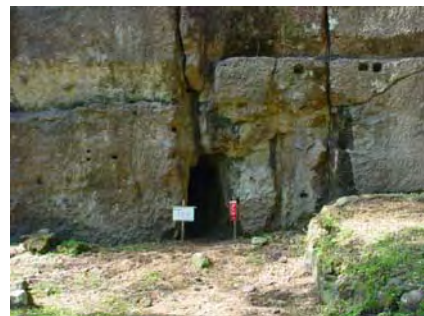
また当エリアには「銀の里工房」があり店舗は周辺にうまく溶け込んでいる。銀山といい

ながら「銀」に関わる商品を提供している商店数が少ない中で目を引く存在感がある。さりげなく、そして個性のある施設・店舗は整備される必要があるだろう。

③産業遺産エリア

産業遺産エリアは、大久保間歩など間歩群地域や山吹城跡、石見城跡などの大半が山中にあるエリアを想定している。

想定している当エリアは銀山柵内と呼ばれる広大な面積を対象地域とする。16世紀前半から本格的に開発され20世紀まで創業された銀鉱山遺跡の本体となる部分である。銀山柵内とは江戸時代はじめに柵で厳重に囲まれていたことからこの名がある。銀の生産活動はもちろんのこと生活・流通・振興・支配に関わる遺構・異物が良好に残る地域である。



釜屋間歩付近

従って、石見銀山遺跡の本丸とも言えるべきエリアであるので、遺跡そのものに手を加えたりせず、あるがままの姿をそのまま維持保存できる姿が望ましい。とはいうものの良好な状態で残されている間歩については、できるだけ多くの訪問者に観覧できるように整備されなければならない。整備については銀山柵内の間歩および間歩に至るトレッキングルートとしての整備はもちろん、更には周辺に配された矢滝城跡、矢筈城跡などを含む広大なエリアをも整備していく必要があるだろう。石見銀山遺跡は遺跡そのもの（史跡、コアゾーンと呼ばれる核心地域）や重要伝統的建造物群保存地区に指定された建物だけが世界遺産ではなく、広大な緩衝地帯（バッファゾーン）までを含むエリアを財産とした産業遺産である。緩衝地帯（バッファゾーン）を銀山遺跡の大きな借景と捉えて景観法による景観計画区域に指定のうえ、景観計画に基づき整備されるべきであろう。当エリアは一般観光客や万人向けの観

光ルートというより、遺跡そのものについてより一層理解を深める人、調査に携わる人、自然の中を散策してみたい人が対象となること、さらに当エリアは基本的に徒歩による移動以外はないものと思われるので、出来るだけ今までの姿を生かし残すことを前提に周辺整備がなされなければならない。整備の目安として

- 1) 遊歩道の整備（含、周辺地域の草刈など）
- 2) 表示施設の整備（説明や道案内設備）
- 3) 情報連絡施設の整備（可能な限り携帯電話の通話可能地域化）

等、自然環境保全を第一義として人工的な設備は必要最小限にとどめる、あるいは目立たないような設置方法をとることとなる。

また、このゾーンは以上述べたエリア自体の課題はもちろん石見銀山遺跡のエントランスで茶室で言うところの「露地」にあたる地域でもある。従って、本丸へ入っていくための気持ち高め、一心同体となるためにも十分な配慮作りが必要となるエリアである。具体的には遠方からの景観として山肌がむき出しになるような開発はしない、廃棄物捨て場にしない、相応しくない構造物や看板等は設置しない、等が求められる。

④銀山街道エリア

銀山街道エリアは鞆ヶ浦道、温泉津沖泊道を中心に想定している（西田地区など周辺地区を含む）。

当エリアも基本的な考え方としては、前述の産業遺産エリアと同様な方向性とする。



⑤港町エリア

当エリアは石見銀山の銀の積出港として栄えた鞆ヶ浦、沖泊の両港と伝統的建造物群保存地区に指定されている温泉津温泉街を対象とする。16世紀前半の積出港であった鞆ヶ浦、16世紀後半の積出港であった沖泊はいずれも天然の良港で、船の係留用に作られた鼻ぐり岩や当時の土地利用形態をそのまま残している集落群から成り立つ。往時を偲ばせる集落群、

および周囲の景観はまさにタイムスリップしたような感じを起こさせてくれるが、特に温泉津温泉街の入り口を通り越して沖泊港に向かう小型車が一台やっと通れるようなトンネルを抜けるとまさに別世界で、タイムトンネルから抜け出したような錯覚に陥る。地元の住民にとっては狭く、暗い、車のすれ違いも出来ない不便なトンネルかもしれないがタイムスリップする演出としては最高の小道具ともいえる。大正、昭和の時代がそのまま残された文化財的な集落といえよう。

残念なことに港および周辺施設がコンクリートで塗り固められた姿はまことに痛々しい。なんとか周辺の景観にマッチできるように修復できないものかと願わざるを得ない。ここでも街づくりの基本コンセプトは昔のままを忠実に残し、来訪者の郷愁、共感を得るようなことが望まれる。



靱ヶ浦、沖泊の両港は機能としては銀の積出港として同じであるが距離的に離れており、訪問者としては同一対象とはしづらい。両方を見るにはマイカーによる移動が現実的であろう。合併後は新生大田市として同一自治体となったが、靱ヶ浦は旧仁摩町、沖泊は旧温泉津町で行政的にも一体として整備された歴史は無い。外来からの来訪者にとってみれば沖泊と温泉津地区を同一訪問地としてみるほうが自然である。さらに沖泊、温泉津地区には旧来から湯治温泉客や「焼き物のさと」など集客設備のある地域であるので、それらを有機的に結びつけ有効活用する方策が良いものと思われる。靱ヶ浦、沖泊を結ぶルートとして地上ルートは、距離的に離れていること、手段的にも限られることから現実的ではないと考えられる。一方、港であることを考え海上ルートが想定されるが利用客や事業主体を考えると実現性は少ないかもしれない。

3. 支援設備の整備

(1) 駐車場対策

交通アクセスの問題では

- ① 当地に至るまでの交通問題
- ② エリア内の交通問題（大森町エリア、銀山遊歩道エリア）

の問題であるが、とりわけ②の中でも駐車場が一番の問題と考えられる。

現在、この地区における駐車場の収容能力は

駐 車 場 名	料金	収容台数（おおよそ）		合 計
		普通車	バス	
1. 代官所跡前	無料	4 0	0	4 0
2. 銀山公園	無料	3 8	3	4 1
3. 安養寺下	無料	1 3	2	1 5
4. 龍源寺前	有料	2 0	0	2 0
5. 市民ふれあいの森公園	無料	1 0 0	2 0	1 2 0
合 計		2 1 1	2 5	2 3 6

となっている（公表数値ではなく筆者の目測）。一般観光客が最も利用する駐車場は「代官所跡前駐車場」と「銀山公園駐車場」であり、「安養寺下」と「龍源寺前」は収容台数的にも地理的にも多くないと考えられる。「市民ふれあいの森公園駐車場」は収容能力面からは最大のキャパシティーをもっているが、現状の利用実態はほとんどないものと思われる。「市民ふれあいの森公園駐車場」以外の「代官所跡前駐車場」「銀山公園駐車場」「安養寺下」「龍源寺前」の4駐車場における車両の収容状況から訪問客数を推定すると

普通車：333人＝111（40+38+13+20）台×3人（平均乗車人員）

バ ス：150人＝5（3+2）台×30人（平均乗車人員）

となり、瞬間的には500人程度の収容力があると見られる。一方、一日あたりの車両の収容力としてみれば駐車場の回転回数を普通車3回、バス2回（現地滞在時間を2時間程度、駐車場の実稼働時間6時間程度と仮定）と仮定すると訪問客数は

普通車：999人＝111台×3人（平均乗車人員）×3回（駐車場回転回数）

バ ス：300人＝5台×30人（平均乗車人員）×2回（駐車場回転回数）

となり、一日あたり最大で1300人程度の収容力があると見られる。

因みに一日あたり1300人の来訪者があり土日の繁閑を想定した年間の来訪者は

土日に最大客数が来訪すると13万人＝1300人×100日（年間の土日を繁忙日）

平日は土日の半分以上の500人として12.5万人＝500人×250日（年間の閑散日）

となり、年間では25.5万人程度の来訪者があるものと推定される。島根県川本総務事務所が平成16年度に行った年間観光入り込み客数（大森町への車両入り込み数の実測値から算出）は26.6万人となっており、駐車場のキャパシティーからの推計値である23万人は概ね実測値に近い推定値ということが出来よう。

さて、石見銀山遺跡が世界遺産として登録され、訪問観光客が増加することが予想されている。訪問客の大半が土日や祝日を中心とした休日に集中することを考慮すれば、現状の駐車場の収容台数でほぼ限界に近いものと判断される。訪問客を増やさないで現状程度の賑わいの中で石見銀

山遺跡を売り出していくのか、もう少し訪問客数を増加させるかの議論はここでは置くとして、増加が予想される現実に対処するためには「市民ふれあいの森公園」の活用が不可欠となってくるものとする。

「市民ふれあいの森公園」の収容台数から受け入れ可能訪問客数を上記と同様の仮定で算出すると

普通車：900人＝100台×3人（平均乗車人員）×3回（駐車場回転回数）

バス：1200人＝20台×30人（平均乗車人員）×2回（駐車場回転回数）

となり、瞬間的には2100人程度の収容力があると見られる。これを年間の繁忙日を考慮し、上記と同様な推計をおこなうと

21万人＝2100人×100日（年間の土日を繁忙日）

25万人＝1000人×250日（年間の閑散日）

となり、約46万人（21万人＋25万人）の増加に耐えうる施設となることが分かる。

駐車場のキャパシティ上の問題はクリアできるが、「市民ふれあいの森公園」からの最寄の「銀山公園」までのおおよそ2キロメートルと相当の距離があり、来訪者にとってはその移動手段に課題が残されているといえる。「市民ふれあいの森公園」から最寄の「銀山公園」までの道中は狭いながら旧道として舗装整備されている。

移動手段として①徒歩、②でシャトルバスの運行等が考えられる。徒歩の場合は万人向けの手段とはならないこと、単調な道中に如何に変化をもたせるかについて課題があろう。シャトルバスの場合は運行面や技術上は支障が無いものと思われるが、運行料金（含、維持管理の費用など）や繁忙時の対策に課題を残している。

現在のところ、「龍源寺前駐車場」を除き「代官所跡前駐車場」「銀山公園駐車場」「安養寺下駐車場」「市民ふれあいの森公園駐車場」のいずれも無料となっている。世界遺産登録を契機に来訪者が（一時的であるにせよ）増加が予想され、瞬間的には「代官所跡前駐車場」「銀山公園駐車場」はパンク状態に陥ることは十分予想される。また、相当数の車両が狭い町並みに入り込んだ場合、悠久とした町並みの雰囲気は損なわれるばかりでなく機能的にも麻痺してしまう恐れが十分にある。駐車場問題は駐車場のキャパシティのみならず、街づくりの原点を考える大きなポイントとなる。その上で

①有料化するか無料化とするか

②広大なエリア内の移動手段の検討

③大森町や柵の内全体の車両入り込み制限

④既存の駐車場が現状どおりでよいか

等を含めた総合的な観点から構築されなければならない。

(2)交通問題の検討

ここで検討する交通問題はエリア内での移動問題にスポットを当てて考えることとする。石見銀山遺跡の世界遺産としての対象エリアは、コアゾーン（本章 2 節「遺跡整備の方向性」で示した大森町エリア、銀山遊歩道エリア、産業遺産エリア、港町エリア）だけで約 442ha、周辺の緩衝地帯（バッファゾーン）で 3,663ha と非常に広範囲となっている。世界遺産としての面積では白神山地、知床、屋久島の自然遺産や紀伊山地の霊場と参詣道につぐ広さといってよい。一方、石見銀山遺跡は観光スポットとして大森町エリアの狭い範囲にしか目が行かないという一面もあり、この観点からは石見銀山遺跡は「点」でしかない。石見銀山遺跡の真の評価という観点からは少なくともコアゾーン全体を巡ってみなければ理解が出来ないという面もあり、エリア内の移動は駐車場問題と並んで大きな問題である。

石見銀山遺跡としての広義のエリア（コアゾーン＝銀鉱山跡と銀山町、港と港町、そしてそれらを結ぶ石見銀山街道の総称）は非常に広範囲に及ぶ。沖泊地区や鞆ヶ浦地区など相当な距離の離れた場所に点在していることから、エリア内の移動手段としての交通問題は避けて通れない宿命を持つ。ここでは、広義のエリアとしての交通問題と狭義のエリア（A 大森町、B 柵の内地区、C 沖泊地区、D 鞆ヶ浦地区）としての交通問題に分けてみることにする。

まず始めに狭義のエリアとしての交通問題として

A) 大森町エリア



大森町エリアの町並みは、往時の町並みが再現された重要伝統的建造物群保存地区に指定され石見銀山遺跡の中では最も賑わいのあるエリアである。基本的にはマイカー、バスなどの動力車の乗り入れを禁止し、「散策」して町並みを体感してもらうことが一番である。しかしながら来訪者の中にはお年寄りの方や身障者の方もあるのでその面の出の対策も必要である。大森町エリアの歴史的環境や景観からすれば、

◀人力車

◀かご

◀レンタサイクル

◀馬車

等のような環境にマッチした移動手段も考えられよう。

動力車について言えば、幸いにも大森町エリアは銀山川をはさんで対岸の市道には石見交通によりバスが運行されている。しかしながら、バスの便数としては一日10便、このエリア内のバス停は「大森代官所跡」「新町」「大森」そして「銀山公園駐車場」の4箇所にとどまる。従って

◀便数の増加と運行時刻の定間隔運行化

◀不規則運行としても随時呼び出し可能なバス・タクシーのデマンド型交通サービス

等が考えられる。これらは景観保全や環境と一体となって運行されるべき移動手段であるので、デザインとか運行形態については統一性が求められよう。1つのアイデアとしてはボンネット型のバスの運行等、同じシャトルバスにしても同地区の持っている原日本風景とも言うべきシーンにマッチした郷愁感のある演出も必要ではなかろうか。

B) 柵の内地区（銀山遊歩道エリアと産業遺産エリア）

このエリアは前述したとおり、石見銀山公園上から龍源寺間歩に至る銀山川沿いの約2.5キロメートルの散策路（以後単に散策路）と大久保間歩、釜屋間歩、昆布山谷の間歩群、山吹城跡など遺跡跡（以後単に遺跡跡）から成り立つ広大なエリアである。

「散策路」は降路坂に至る車両の通行可能で舗装が施してある市道と銀山川をはさんだ自然豊かな「銀山遊歩道」から成り立つ。この「散策路」も大森町エリアと同様、マイカー、観光バスなどの動力車の乗り入れを禁止し自然との一体感を体感してもらうことが一番である。このエリアも健常者および履物対策の十分な人（ハイヒールでないこと等）は歩くことを第一義として、それ以外の人に適切な移動手段、交通手段を提供することが肝要と考える。従ってここでも

◀人力車・かご・馬車

◀シャトルバスの便数の増加と運行時刻の定間隔運行化

◀不規則運行としても随時呼び出し可能なバス・タクシーのデマンド型交通サービス

等を考えなければならない。ここでも大森町地区と同様、デザインとか運行形態については統一性が求められる。

C) 沖泊地区（港町エリアのうち旧温泉津町分）

公共交通機関を利用して訪れるにはJR 温泉津駅、あるいは石見交通太田江津線の温泉津駅前を下車、徒歩で約20～30分程度を要する。マイカーでは「ゆうゆう館」前の駐車場から徒歩で10～15分程度を要する。沖泊地区の特徴として大森町エリアに比し、①訪問者の数が圧倒的に少ないこと、②鼻ぐり岩など限られた遺構以外には目立ったモニュメント性はない、③コンクリートで固められた船着場は趣を害している、④エリアが極めて狭い、⑤現地に至るまでの道路が狭い、⑥駐車場など訪問者対策が殆んど行われていない、⑦来訪者は一般観光客が少なく、歴史に興味を持つ一部の人に限られる、等が挙げられる。

以上のことから、沖泊地区エリア内の交通問題は、マイカーや観光バスから降車後の散策路を中心とした対策を考えるべきであろう。駐車場については狭隘な地勢と訪問者の絶対数からすれば常設駐車場を今後整備していくことは経済合理性に合わないかもしれない。観光シーズンなど一時的に増加する訪問者（マイカー、観光バス）に対しては温泉津町総合運動公園や体育館の駐車場の開放等により対処するのが現実的ではなかろうか。

視点を変えて1つの提案を行う。温泉津港はかつて北廻り船の重要な拠点港であった。船舶を使って沖泊地区と鞆ヶ浦地区を海上からアプローチすることも一方法であろう。



本件については経済性を考慮していないのでひとつのアイデアとしての提案に留めおく。石見銀山遺跡の一訪問地としてのみの観点で海上交通を考慮すれば、採算性が取れないことも十分に予測される。温泉津温泉の宿泊客とセットにし「イカ釣り」「わかめ狩り」「磯釣り」など体験型の観光を加えることで付加価値を高める一環として取り組むのも方法である。地域住民にとっては何の変哲もない海岸線の遊覧船であっても都会地から来た観光客にとっては十分にインパクトのある景色となり感動感を与えることもできる。いずれにしても採算性を十分に考慮する必要がある。

D) 靱ヶ浦地区（港町エリアの旧仁摩町分）

沖泊地区以上に現地に至るまでの公共交通を利用した場合の距離やマイカー等の駐車場問題は厳しい。距離はあるが国道9号線沿いの馬路駐車場を利用したアプローチが現実的であろう。

次に広義のエリアとして交通問題は前述の狭義のエリア（A 大森町、B 柵の内地区、C 沖泊地区、D 靱ヶ浦地区）をそれぞれ相互間に結ぶ交通問題である。地理的な面から言えば、A 大森町、B 柵の内地区を1つの集合体として捉えることが出来る。C 沖泊地区はAB地区の西方約10キロメートル、D 靱ヶ浦はAB地区から北西に6～7キロメートル離れてそれぞれが独立している（行政的にもA 大森町 B 柵の内は旧太田市、C 沖泊地区は旧温泉津町、D 靱ヶ浦地区は旧仁摩町）ことから広義のエリアとしては3箇所である。現在のところ、この3箇所を有機的に結びつける公共交通機関はない（厳密には石見交通バスとJRを乗り継げば可能であるが便数、乗り継ぎ時間を考慮すると非現実的である）のでマイカー、観光バスを利用して移動するのが現実的である。この面では道路は国道9号線、県道仁摩瑞穂線が整備されている。緩衝地帯（バッファゾーン）の景観整備に重点をおきながら案内看板の設置など利用客の便を図ることとなる。広義のエリア内交通問題は「^{ゆのつおきどまり}温泉津沖泊道」「靱ヶ浦道」を利用したトレッキング、散策路が主体で、ここでは交通問題というより「石見銀山街道」を史跡の一部として整備していく観点から捉えられることになる。

以上を総括的に見てみるとエリア内の交通問題とは、A 大森町地区・B 柵の内地区内の交通問題とC、D地区の交互間の交通問題に要約され、重点はA 大森町地区・B 柵の内地区内に置かれることになる。

(3) ガイダンス施設

分かりにくい石見銀山遺跡を来訪者に知ってもらうためにガイダンス施設建設の声がある。豊かな自然を満喫するばかりでなく石見銀山遺跡の持つ意義を正しく理解してもらうためには系統立てて説明できる仕組みが必要となり、そのためのガイダンス施設建設である。現在のところ、このガイダンス施設の役割は代官所跡の資料館が担っている。

しかしながら、今後新たなガイダンス施設の建設のためにはいくつかの問題点、課題も指摘されている。

① 費用（イニシャルコスト+ランニングコスト）

② 建設地

③ 規模

④ 入館料の金額

等である。

規模の大小はあるものの逼迫する地方財政の中で新たな建設費負担は相当な金額と予想される上、建設後も維持管理のためにも費用が発生する。駐車場の項で検討したように、当地の地勢的な制約から来訪者数は限定的と思われる。その少ない来訪者、またそのうちのガイダンス施設入館希望者となるときわめて限定的なものと予想される。入館者による入館料だけではガイダンス施設の建設費の償還、維持管理費用の捻出は相当困難と見られる。一般的にも公的な施設では入館料で施設の維持管理費は全額まかなえないケースが多いので、石見銀山のガイダンス施設でも行政側の持ち出しは覚悟しなければならないと考えられる。

国土交通省の試算によれば、一般的な事務所建築（6,000 m²）の65年間のライフサイクルコストのうち、イニシャルコスト（建設コスト）はわずかに15.9%に過ぎず、それ以外にランニングコストが83.5%、解体コストが0.6%ある。仮に10億円の建設コストがかかったとすれば爾後の総コストは約63億円と試算される。65年の耐用年数、償却年数から逆算すれば建築関係で年間97百万円のコストがかかり、その上人件費を50百万円（＝@5百万円×10人）をミニマムとして学芸員や空調関係、水道光熱費などを考慮すればさらにコストは嵩むものと想定されるが、国土交通省の試算には固定資産税が含まれるため減額する必要がある。従って、ここでは単純に建設コストと人件費の合計で年間1億4千7百万円がコストとして必要なものとして試算を試みる。

年度 (平成)	石見銀山訪問者数（単位：人）			
	合 計	銀山資料館	龍源寺間歩	河島家
11年	260千	29,246	26,690	1,485
12年	280千	33,832	30,590	1,589
13年	300千	30,308	34,701	2,882
14年	290千	27,729	36,464	2,628
15年	310千	27,441	40,279	2,844
16年	318千	26,990	42,652	2,437
17年	340千	31,561	56,567	3,313

《出所 島根県観光動態調査》

上表は過去の石見銀山資料館（代官所跡）の入館者数を年度ごとに示したもので、概ね銀山全

体の訪問者数の1割前後が入館したことが分かる。ガイダンス施設の年間コストを上記の通り1億4千7百万円と見積もれば、施設維持のための入館料を単純に逆算すれば4,200円(=147,000千円÷35千人)となる。このような施設の入館料を1,000円程度と仮定すれば相当な赤字を見こまねければならない。仮に入館料を1,000円とし、それでペイするためには147千人の入館者(石見銀山を訪れた人の二人に一人が入館する)か、現状程度の入館割合から逆算した建設費(=建設関連の総コスト+人件費)は-155百万円(=((1,000円×35千人)-50,000千円)×65年×15.9%)つまり建設できないと算出される。人件費を全額行政負担(最終的には大田市民負担)として建設にかかるコストで逆算してもイニシャルコストは362百万円となる。362百万円の建築物(除、展示物等のコスト)で1,000円の入館料を徴収するか、石見銀山全体の訪問者数の半数が入館する(現状の割合からすれば5倍の誘導を必要とする)かであり、いずれも厳しい予想となる。

この試算はあくまでも民間のゴーイングコンサーン企業を前提とした大まかな試算結果であり、固定資産税や減価償却などを意識しない公的な施設建設とを一律に論じることはいできない。しかしながら、近時増加傾向にあるPFI方式や委託管理者制度に見られるように公的な施設にも民間的な発想が取り入れられつつあり、公的な施設といっても独立採算的な事業にはコスト意識が不可欠である。とかく建設費のみに目が向けられがちであるが、ランニングコストは実はイニシャルコストの5倍以上を要することを考慮しておく必要がある。世界遺産登録をきっかけとして大田市の石見銀山関連施設が夕張市のメロン城(地方自治体の財政破綻)の再現となりかねない懸念もある。

「市民ふれあいの森公園」は現在、建設予定候補地の一つになっている。どのような形や規模で建設するかにもよるが、敷地面積の点からはガイダンス施設建設は十分に対応可能であり、駐車場に隣接する相乗効果の面でも検討に値すると考えられる。また、「市民ふれあいの森公園」は大久保間歩などの大規模間歩の残されている仙ノ山とは直線的には近いロケーションにありその面では可能性を秘めた場所ではある。いずれにしても財政負担(イニシャルコストとランニングコストの両面から採算性を考慮の上)との兼ね合いの中で十分に検討されるべきであろう。また、本稿では言及しないが、ガイダンス施設建設後の石見銀山資料館の在り方、つまり共存させていくのか別の目的に変更するのか等についても十分に議論のうえ進めていく必要がある。

一方、町並みの整備と景観保全の項で述べたように大森町の景観対策や休憩施設、町の賑わい確保などの観点から廃屋の活用も一つの手段と考えられる。この場合にも一箇所あたりの情報提供量が少ないこと、廃屋が点在しており有機的に結びつける方法の活用方法、廃屋の修繕にも相当な資金が必要となること、ガイダンス施設として案内人の要否など検討されるべき課題は多い。

九州黒川温泉では、杉の丸太を輪切りにして入湯手形を製作し、利用者は1200円で購入すれば3箇所の温泉を自由に回れるシステムがある。点在している廃屋をガイドンス施設に見立ててこれらを一通り巡回することで（ガイドンスを受ける）目的を達成するなど方法模索すれば、この方法も十分に値するものと考えられる。石見銀山遺跡のよさを知ってもらうための新たな施設建設も必要かもしれないが、それ以上に大森町の賑わいを創出する観点からも既存の施設、設備の活用策が求められる。

(4)ガイドシステム

現在のガイドシステムは、ボランティアに支えられている面が大きい。「石見銀山ガイドの会（会長：西本俊司氏）」らによる無料のガイドシステムである。さらに目には見えないが、沿道や本間歩へ至るルートなどの草刈や溝の清掃をはじめとして地域住民、大田市民、ボランティアの努力により支えられている。

1999年に世界遺産登録された「日光の社寺」のガイドシステムにおいては、「日光伝道案内協同組合」の登録組合員によるガイドシステムがあり2時間で5,500円の料金となっている。2000年に世界遺産に登録された「琉球王国のグスクと関連遺跡群」においても「歴史ガイド」として1時間3,000円の料金となっている。

さて、有料のガイドシステムである以上、

- ① ガイドの登録には、一定の資格・能力を勘案し確保すること
- ② 常に需要にこたえるだけの員数を確保できること
- ③ 登録ガイド以外はその業に当たさせないこと
- ④ ガイド料が対価として満足のいく一定水準であること

等の要件が求められる。

①については歴史の教職にあったもので石見銀山に造詣の深い者や京都検定、萩検定などのような『地元検定』の資格試験合格者が該当すると思われる。ガイドを受けた者に十分な知的満足感を与えるとともに「多様な価値を持つ銀山の奥深さを理解してもらえよう」な志の高い人で、ガイドとして納得性のある人選が必要となる。『地元検定』の多くの主催は地元の商工会議所が音頭とりをしているケースが多い。商工会議所を含めた広い意味での「産学官」の連携が求められる。

②については、観光客の繁閑に十分にこたえられる必要がある。現在の大森地区だけでは、到底その需要を満たせないで大田市はもとより近隣の出雲市、川本町、邑南町、江津市等との連携が不可欠といえる。また、島根大学や島根県立大学の学生ボランティアの活用も効果的と考える。この面でも「産官学」の連携は必要となつてこよう。

③についてはガイドがプロとして自立する収入の確保のためというばかりでなく、ガイドの一定水準を担保するためには避けて通れない問題といえる。世界で最も世界遺産の多い国、イタリアのミラノ、ヴェローナ、ベニス、ローマの各都市においては登録されたガイド以外はガイドを職業とすることが出来ない。



たとえ、ツアーの添乗員に十分に説明できる知識、能力があったとしても認定ガイドでなければガイドをしてはいけない仕組みが確立されている。当初は、「私設」ガイドや添乗員などとの摩擦もあったようであるが、現在ではお互いに認識が十分に出来上がっている。そこに至るまでには、例えば条例により「指定地域については専門ガイド以外はガイドを行ってはならない」というような仕組みづくりが求められる。この面からもますます「産官学」の連携は必要となつてこよう。④については相応のサービスを提供する以上、当然の対価を求めるべきである。日本国内の世界遺産施設の案内人としての相場は、概ね1時間当たり3千円程度の水準と考えられる。20～30人の団体客であれば、一人当たりの負担額は100～150円となるが、最近の旅行者で多い夫婦とかカップル、家族連れといった小人数グループにとっては負担額が大きくなってしまふ。機械によるガイド(例えばGPS連動ポータブルプレーヤーの貸出)、ガイド内容を簡略化した「ミニガイド」、籠や人力車の運転手によるガイドなどの方法もひとつの方法として可能性を模索することも必要であろう。



ガイド自身の料金設定もさることながら、石見銀山遺跡は相当な広範囲に及ぶ面積を手入れを行う必要があることから、草刈など周辺環境整備に携わる人々やボランティアをも賄えるだけの収入が必要と考える。すなわち、ガイドが集めた料金を全体でプールし、ガイド自身もさることながら裏方の作業人全体をも

賄うシステムを構築する必要があるからである。大田市大森町では全戸加入の「大森町文化財保存会（会長：吉岡寛氏）」があり、住民自らが遺跡の清掃や保存活動を行ってきた。時間の経過とともに住民の高齢化は進展していくことに加え、結束力も次第に希薄となっていくことは想像に難くない。

世界遺産登録まではボランティアであっても本当は世界遺産登録後の長い、長い未来をも見据えた仕組みが求められる。今までは行政からの補助金やスポンサー企業の寄付金で十分とはいえないまでも相応の経費は賄えたであろう。しかしながら、今後、逼迫する行財政の仕組みからは裏方作業人の経費が今後は十分に期待できないことは十分に考えられることである。そうした面からもガイドの有料化や駐車場代金の設定によって地域の景観やサービスを享受する受益者に相応の負担を求め、石見銀山地区が経済的に自立できるようなシステムを構築しなければならないと考える。

第5章 石見銀山遺跡による観光振興

1. 観光振興による「まちづくり」

(1) 観光振興の目的

石見銀山遺跡とその文化的景観は、世界で認められた人類のかけがえのない貴重な資源で、地域社会は永続的にそれを守って保存・保護すべきことは地域社会の使命である。但し、それには地域自体が持続可能を保証する仕組みを持たなければ石見銀山遺跡の保存・保護は担保されない。

また、石見銀山遺跡とその文化的景観の観光振興による「まちづくり」とおして、石見銀山遺跡の持続可能な保存・保護を保証するとともに、地域再生を果たすことが大切である。

そして、観光振興による地域再生の取組みは、地域住民の誇りや愛郷心等の精神的な満足感を与えると同時に、地域産業を振興させ事業者に経済的満足感を与えて、地域の存在価値を高めることになる。

ここでは、観光振興を、観光客を増加させ、地域の賑わいをもたらし、このことで、地域内の文化活動（遺跡維持・保全、産業歴史の学習等）、経済活動等が増加すること、と定義したい。

(2) 観光振興による「まちづくり」

観光振興による「まちづくり」を成功させる主要なポイントは、

- ① 地域に対する誇りと熱い思いがあり地域振興のマネジメント能力を有するリーダーが存在すること
- ② 地域住民の理解と協力
- ③ 地域資源の発見と活用

- ④ アイディアの収集
 - ⑤ 楽しめる、癒される等感覚に訴える要素があること
 - ⑥ 観光マーケティング等観光振興の専門家がいること
 - ⑦ リピーターに対する対応などを考えること
- などである。

なお、観光振興の各種事業活動の内容に応じて、効果測定のための指標をいくつか設定し定期的にチェックすることで、その活動が観光振興に貢献しているか、評価する仕組みを事前に用意するが、観光振興の成功の条件といえる。

具体的な指標には、観光客数、保全活動のボランティア数、トイレ数、事業者数・従業者数、宿泊者数等が考えられる。

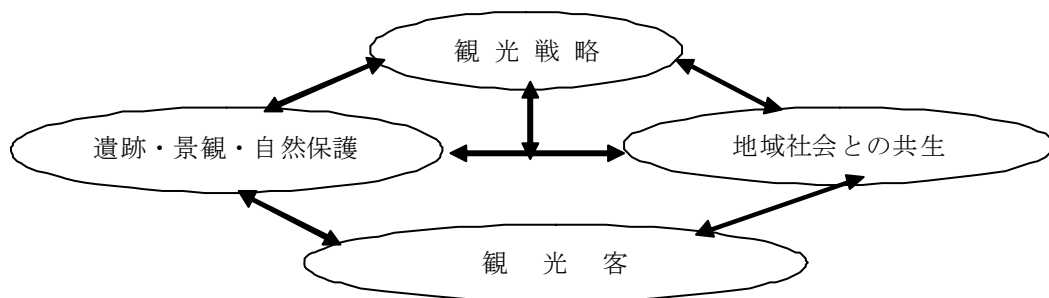
(3)「持続可能な観光地」とする観光戦略の必要性

石見銀山遺跡を「持続可能な観光地」とするには、次のような 5 つの原則を掲げて振興に取り組む必要がある。

- ① 地域社会に貴重な地域資源を後世の世代に残す組織や仕組みが整えられていること。
- ② 観光地として短期的評価と長期的評価を得るとともに、地域社会にとって短期的利益と長期的利益に繋がること。
- ③ 地域の独自な歴史・文化が感じられるとともに、常に魅力を秘めていること。
- ④ 貴重な観光資源に急激な悪影響をもたらす受容限度を超す観光客の受入を適正化すること。
- ⑤ 来訪者に対するサービスとホスピタリティ（もてなし）の高さがあること。

但し、観光戦略は、石見銀山遺跡・景観、自然環境の保護と地域社会との共生との調和した戦略にする必要がある。それには、適切な観光資源の管理をとおして地域社会、地域資源、観光客の三者が、互いに協力関係を構築することである。

石見銀山遺跡の持続的可能な観光戦略



また、国際記念物遺跡会議（ICOMOS）は、1999年に「文化と観光に関する憲章」を作成しており、その中での「文化と観光に関する主な管理指針」は次のとおりである。

分野	指 針（ガイダンス）
本物性	➤ 真正性（本物であること）を保つことは重要である インターロテーション（解説）プログラムは、 ➤ 文化遺産の評価や理解を促すものであるべきである。 ➤ 適切で身近な方法で、その文化の重要性を紹介すべきである。 ➤ 興味を引いて、時代に合うような人や技術による説明や教育方法を用いるべきである。 ➤ 遺産に対する社会の高い認識や支援を促すものであるべきである。
雇用	観光事業は、 ➤ ホスト社会（受け入れ側社会）に利益をもたらし、その遺産や文化的慣習を保つ大きな動機となるとともに、その重要な手段となるべきである。 ➤ 教育、トレーニング、雇用機会の創出をととして、観光事業による利益を公平に分配することを促していくべきである。 ➤ 地元のガイドやインタプリター（自然解説員）のトレーニングや雇用を促進すべきである。 管理者は、 ➤ 場所の特徴、健全性、生物多様性、地元住民の土地利用権、ホスト社会の社会的・経済的・文化的幸福などに対して、来訪者が与える影響に注意深く対応すべきである。 ➤ 場所の健全性への影響を最小限に抑えるため、一筆書き的な周回ルートを設定すべきである。
尊重	➤ ホスト社会の精神的な要素、価値観、ライフスタイルの尊厳を守る。 ➤ 地域社会、所有者、先住民が、自分たちの土地に対して伝統的な利権を持っていたり、特定の活動や進入を制限したいと願っているかもしれないので、そうした権利や利益を尊重する。 ➤ 対立が生じている問題について、すべての関係者による理解と解決を促し、助けていく。 ➤ 保全することによって、来訪者やホスト社会の構成員が地域の遺産や文化を直接経験し、理解できるよう機会が得られるようにすべきであり、そのためにうまく管理すべきである。
文化	➤ 利用者が、より幅広く地域の文化遺産や自然遺産を見聞することを促進する。 ➤ 観光産業を持続可能なものとするためには、地元社会の代表、および先住民の代表を含むすべての関係者が参加することが必要である。
経済的利益	➤ 収益のかなりの割合を、場所の保護、保全、紹介のために配分する。また、これらの配分について利用者に伝える。 ➤ 工芸品や産物の流通・販売がホスト社会に確実に利益をもたらすようにする。

利用者の満足	➤ 利用者が、楽しく、満足でき、価値ある経験ができるようにする。 ➤ 利用者が、遺産やその保護の必要性に対して最大限理解するために、質の高い情報を提供する。 ➤ 利用者の快適さや安全性を守り、健康を脅かさないために必要な設備を適切に整備する。 ➤ 観光振興への期待が膨らみすぎないように、現実的なものとなるようにする。 ➤ 入場する人数の変動を最小限に抑え、利用者の流れをできる限り平均化する。
協議と評価	➤ 遺産の重要性を理解し、正當に評価するためには、調査や協議を継続することが重要である。 ➤ 保全や観光の計画づくり、更には、その目的、戦略、方針、協約などの作成に、ホスト社会が関与するようにする。 ➤ 観光事業が、その場所や地域社会に現在与えている影響を評価する。

(4)観光戦略展開のための現状分析

①石見銀山遺跡の観光客数の入込み予想

島根県は、今後 9 年間の石見銀山の年間観光入込み客数の予想を発表した。具体的には大森町への入込み乗用車両数の計数に、平均乗車人員を乗じて平成 16 年～平成 24 年の 9 年間の観光入込み客数を予想した。島根県の予想地は、都会地圏を除く世界遺産登録地の平均値を基に算出しているが、石見銀山の地名浸透度は、平均値で採用した世界遺産登録地と比較して劣っている点があり、登録のインパクトの大きさは、平均値を上回る恐れがある。このリスクを回避するため、登録平成 19 年～平成 21 年の 3 年間の観光入込み客数の増加率は、島根県シナリオ平均値を 15%上回るリスクシナリオを作成する必要があると考える。「島根県の試算の算出根拠」平成 16 年度入込み客数の推定値約 266 千人を基準値とし、

- 1) 平成 17 年～平成 19 年の増加率は、暫定登録時（平成 12 年～平成 15 年）の石見銀山の観光入込み客数の平均増加率（年平均 3.45%）を適用
- 2) 平成 20 年は国内の都市圏以外の世界遺産登録地の登録翌年度平均増加率を適用（熊野古道は不算入）
- 3) 平成 21 年～平成 24 年は、②と同じく登録後 5 年間の平均増加率を適用

（単位：千人）

年 シナリオ	平成 16 年	平成 17 年	平成 18 年	平成 19 年	平成 20 年	平成 21 年	平成 22 年	平成 23 年	平成 24 年
島根県シナリオ	266	275	285	295	333	316	327	339	351
リスクシナリオ	266	275	285	339	382	363	376	389	403

なお、一日の入込み客の受入限度については、第 3 章の観光振興のあり方を含めて検討することが求められている。

また、多数の観光客が来訪した場合の石見銀山遺跡の最大の問題は、観光客がもたらす自動車、

ゴミ、トイレへの対応と保全費用である。これを地元だけで負担することについて、よく検討することが重要と考える。

②SWOT分析

現状の石見銀山遺跡の課題・問題点等の分析をSWOT分析(SWOTとは、強み(Strength)、機会(Opportunity)、脅威(Threat)の分析を指す。)で実施する。

◆ 強み (Strength)

- 選鉱から精錬に至る鉱山遺跡、銀山街道、港湾施設は、山林に景観を覆われているものの銀生産に関わって生活してきた人々の集落と併せて良好に残っていること
- 石見銀山の銀生産は、東アジア及びヨーロッパの貿易国と商業的・文化交流するなど当時に、世界の主要な生産地となっていたこと
- 灰吹き法の痕跡と日本での銀生産のパイオニア的な存在なこと
- 歴史資源と環境資源（山、海）の融合していること
- 石見銀山遺跡等の保存・保護に対する地元住民の意識が高いこと
- 世界遺産登録のブランド価値の創出契機が提供されること
- パブリシティによる広告宣伝効果ほか

◆ 弱み(Weakness)

1) 世界遺産登録前

- わかりにくい石見銀山遺跡の価値
- 核施設やモニュメントとなる遺跡等の印象（イメージ）が希薄
- 車等の交通網を通じたアクセスが未整備
- 遊歩道、トイレ、休憩所等が未整備（駐車場不足大森、温泉津）
- 情報提供の未整備
- 世界遺産のエリアが広大で保存・保護に対する過大な管理負担
- 石見銀山遺跡の価値に対する地域の理解不足
- 9号線等主要アクセスからの案内標識がなく来訪者本位になっていない
- 地域・来訪者に対する石見銀山遺跡の世界遺産登録のアピール不足
- 空き家が多くなり地元の生活感が失われる恐れが生じつつあるほか

2) 世界遺産登録後

- 交通機関・アクセスの改善
- 宿泊（旅館・ホテル）の魅力、飲食店の食事、土産物の開発
- 旅行代理店、土産物開発・物販ほか
- 外国人観光客の受入体制

◆ 機会 (Opportunity)

- 世界遺産登録によるマスメディアによる紹介（ワールドワイド）されること
- 観光業者による観光ルート（町並み散策、資料館、熊谷家、代官所他、ガイドンス施設、鉾山遺跡（仙の山山岳コース例：本間歩→釜谷間歩→大久保間歩→佐毘売神社→龍源寺間歩→清水谷製錬所跡）、山吹城周回コース例、銀山街道（降路坂、^{ともがうら}鞆ヶ浦等・古龍等海上・陸上コース）神社仏閣コース他や観光スポットの組み入れが見込まれること
- 国の観光戦略で 2010 年までに訪日外国人旅行者数 1000 万人を目指していること

◆ 脅威 (Threat)

- 全国 3200 余りの自治体が観光地づくりに取組んでいる。
- 石見銀山遺跡の世界遺産登録後の平泉の中尊寺金色堂の世界遺産登録が予定されるなど魅力（目に見える文化遺産）ある他の世界遺産登録地の存在（競争戦略、差別優位性）ほか

3) 観光地としてのインパクト（プラス効果とマイナス効果）

◆ プラス効果（経済効果・非経済効果）

1) 経済効果

- 1次産業、2次産業、3次産業の雇用創出・投資を呼び込むなど幅広い業種への影響力
- 税収の増加
- 起業家の創出
- 新事業・新分野への進出支援ほか

2) 非経済効果

- 地域の魅力が増し地域住民のアイデンティティが醸成
- 地域に誇りを持つことができる
- 地域の隠れた観光資源を発見する契機

◆ マイナス効果

- 遺跡等の損壊
- 自然環境への影響
- 地域生活環境の悪化（騒音、交通渋滞）・・・対策：交通需要マネジメント（駐車場満空情報、パーク＆ライド、シャトルバス、交通制限等コミュニティFMの活用等）
- し尿、排尿の増加
- ごみの持込による処理費用等地域財政負担の増加ほか

2. 町並み保存・環境保存地区の観光振興取組み事例

(1) 岐阜県妻籠地区の取組み事例

1971 年に「妻籠宿を守る住民憲章」で、妻籠地区の観光資源について「売らない、貸さない、壊さない」を策定し、地域全体で観光振興の恩恵が多くの人に行きわたるような取決めをした。

- ① 原則として 1 戸 1 業種とし、既に 1 業種していた業者は新たに 1 業種を認め、3 業種を限度とした。
- ② 土産物は地元売りの妻籠産を優先すること（地元の特産品の開発）
- ③ 民宿は定員 15 名、料理の品目は 7 品目と定めるとともに、料理の材料は地元産のものを使用すること。

以上の取組みを続けて順調に来訪者は増加したものの、1981 年頃には 10 万人以上減少し、それまでの来訪者の 3 分の 1 の 7 万人程度まで減少した。

その当時に認識されたことは、

- ① 観光地というところは来訪者が多いわりには宿泊客が少ないのが普通である。
- ② 宿泊者を増やすには、旅館・民宿の魅力がなくてはいけないこと。
- ③ 今の妻籠では、滞在時間は長くても 2 時間から 3 時間あれば十分である。
- ④ どの観光地も観光客は増加しても必ずピークを迎え、ピークを維持するには大変な努力を要求されること。

こうした認識のもと、観光客の増加の取組み（江戸時代の雰囲気とその地域の人々の生活感が感じられることなど）、観光ニーズの変化、マスコミからの注目が重なり 1997 年頃からは増加傾向が見え始め最近では年平均

80 万人～90 万人の来訪者を集めている。

妻籠は、1960 年代に全国に先駆けて、町並み・集落保存に取組み、1976 年には「重要伝統的建造物群保存地区」に指定されるなど石見銀山遺跡との共通点が多く、観光戦略の策定においても少なからず示唆を与えている。

(2) 福島県大内宿の取組み事例（平成 17 年度観光白書より）

大内宿は茅葺民家が街道筋の両側に立ち並ぶ宿場町で、昭和 56 年「重要伝統的建造物群保存地区」に選定され、保存事業が進められた。平成元年から 2 ヶ年かけて街道沿いに露出していた電柱、電線を街道から見えない裏へ移設され、平成 11 年度には、舗装された街道筋を土の道に戻し、これにより国土交通省の第 13 回人間道路会議賞大賞を受賞するなど、街道筋全体の歴史的景観を向上させる事業が続けられた。

こうした取組みにより観光客は大幅に増え、平成 15 年度にはおよそ 80 万人を数えるまでにな

った。なお、観光客の安全性の確保の観点から、平成 13・14 年度に地区内の携帯電話アンテナが複数本設置された。これについても、伝統的な街道筋の景観が損なわれないよう設置場所の配慮がなされている。

また、大内宿の地区中心にあった旧本陣は、昭和 59 年に古資料等を基に復元され「大内宿町並み展示館」として町営となり、平成 15 年度から 2 ヶ年かけて茅葺研修施設が建設された。その施設は、そこを訪れるすべての人に茅葺屋根の実際の葺き上げていく過程がよくわかるような展示と障害者のためのバリアフリーにも配慮した施設となっている。

3. 観光戦略の展開

(1) 石見銀山遺跡の観光地としてのコンセプト

① 石見銀山遺跡とその地域周辺の観光地としての特性

石見銀山遺跡とその文化的景観は、鉱山遺跡とその流通経路が中世から近代に至る 400 年余りの歴史的な過程の痕跡を残していること。また、周辺には城址、代官所跡等の歴史遺産、神社・仏閣等の信仰遺産、伝統的建造物の町並み等の産業資産、歴史資産、文化資産等多様な資産が積層した観光地としての特性を持っている。特に、以下の 3 点は郷土史家である石村勝郎氏の著書「石見銀山の発見と日本経済に果たした役割」が参考になる。

- 1) 石見銀山遺跡の「山が光った」という発見伝説はロマンとして大切に伝承することが重要である。
- 2) 石見銀山は 1533 年に灰吹き法という進んだ精錬技術が伝わり、それ以後、生野銀山や佐渡銀山へ伝わった。
- 3) 日本に初めてキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエルの書物に石見銀山を意識した「銀の島」という表現が盛んに使われ、当時のスペイン人は日本を「銀の島＝石見銀山」と呼んでいた。
- 4) 貨幣で取引する経済が盛んになる室町時代に鉱山開発が盛んになり、他の鉱山に先んじて、すぐれた鉱山としてデビューし、当時の銀本位経済に基づく京、大阪の文化は、石見銀山の産出銀に支えられたものだった。また江戸時代には、「上方の銀、江戸の金」の二元経済が確立された。

また、仙ノ山周辺に散在する本間歩、釜谷間歩、大久保間歩等の銀採掘遺跡、沖泊まり港、^{ごうろさか}降路坂等の遺跡は、木々や竹林、草花、美しい海岸線等が一体化し自然にやさしい産業遺産といえる。地域周辺には、三瓶山を中心に三



降路坂

瓶自然館、三瓶小豆沢埋没林公園等、豊かな海洋資源、温泉津温泉、三瓶温泉等良質な温泉資源等豊かな自然の香りを保ち、良好な山と海が背景として融合した観光地としての特性を持っている。このことは、銀等の採掘による資源開発が約 400 年経過して自然に溶け込み、それを遺跡全体で“400 年の時間経過”として感じることができる。この特性を生かすことが石見銀山遺跡の観光の魅力といえる。

②後世の世代に残す仕組みを整えること

石見銀山遺跡の維持・保全活動は、行政・任意団体・一般企業・個人がそれぞれの立場から、魅力ある観光地として存在し続けてほしいとの願いを込めて行っている。但し、今後は世界が普遍的な価値として認めた観光地で、単なる地域資源の維持・保全のステージから、世界遺産登録基準のそれにランク・アップすることになる。加えて今後は、現状の広大な遺跡を良好で分かりやすく、魅力ある観光地として永続させる組織体制の整備が求められている。こうした考えを基に、既に行政主導で石見銀山遺跡の維持・保全活動を管理する組織の立ち上げに向け動きが始まっている。こうした組織が実効性ある活動を行い、それを拡大・加速する取り組みが必要である。

なお、こうした取り組みを財政面から支援する目的で、観光客から維持・保全費を徴求することも考える必要がある。

③観光ニーズの変化への対応

観光は、中国の古典「易経」の中で、一国の治世者はくまなく領地を旅して、民の暮らしを観るべしからはじまり、「国（地域）の光を観る」と言われている。最近の観光ニーズを見ると名所見物型の観光（マス・ツーリズム）から参加・体験型の「学びや癒し」や歴史・文化、ロマンが感じられるエコツーリズム、グリーンツーリズム他への観光ニーズへの変化がみられる。こうした観光ニーズは石見銀山遺跡の特性と合致している点が多く存在する。

また、観光ニーズには、「観る」以外に、「遊ぶ」、「買う」「作る」、「食べる」といったニーズが存在し、これらのニーズを充足することが必要である。こうした多様なニーズに応えられるよう、地域社会で分野別枠組みや仕組みを準備することが必要である。

④石見銀山の観光の基本コンセプトの要素と設定

観光の基本コンセプトは、次の 4 つの大きな要素から構成されている。

- 1) 歴史・文化的な有形・無形な社会的要素（有形：産業遺産、神社・仏閣、伝統的建造ほか、無形：祭り、民話、神楽、風習、食事ほか）
- 2) 自然環境要素（自然の中の鉱山遺跡・遊歩道、城址、良質温泉地域、山と海が融合した積出港遺跡・美しい海岸線他）

3)対象とする主な観光客層（主に、中高年層、女性、学生）

4)全体の視覚的な平面・空間デザイン（平面デザイン：鉱山遺跡の分散、伝統的建物の集中、
銀山街道の長さ等各観光地の位置と約 400ha の広大さ、空間デザイン：色彩はセピア調、質感（木材、鉱石、銀等金属製品）高低（低層）、形態（伝統）ほか）以上の要素から、魅力ある観光地で持続可能性を確保するには、観光客は石見銀山遺跡の保存・保護の精神を理解・納得させるとともに、観光客がゆっくり石見銀山遺跡の特性＝多様な魅力（観光資源）を堪能できる空間・時間のゆとりスペースを確保できる観光設定をすることが必要と考える。具体的には、石見銀山の観光要素は、産業歴史・文化の要素と良好な自然環境要素を踏まえた、知識や教養を深める学習体験型や心を癒す感覚・感性型のイメージ、また、大航海時代のロマンが感じられるイメージを基本コンセプトにしたい。

なお、基本コンセプトの表現は、短くわかりやすく、観光客へどのように見てもらいたいのか伝わるような表現を掲げることが大事である。（コンセプトのキーワードとしては、「山が光る、銀の島」ほかを考えられる。）

⑤観光イメージの形成

中世・近代の鉱山の歴史・文化や大航海時代のロマンなどと良好な自然環境とが、融合している姿を醸し出している。産業遺産と自然環境との調和・共存の演出が相応しいと感じる。それには、地元の人々の生活がそうした演出とマッチしている姿が来訪者への良好なイメージを残すことに繋がる。

なお、歴史・文化については、伝統的建造物やその景観の統一で既に取り組みがされているが、全体的なイメージには、先進地の取り組み事例が参考となる。

具体的なイメージの統一化としては、A 電線・電話線を町並みの景観から見えないようにすること、B セピア調（ノスタルジック・ロマン）に色彩統一、C 観光客の自動車道路通路の制限と舗装道路から可能なかぎり土の歩く道へ変更、D 空き家は週末入居等の対策を講じて地域の生活感が感じられる工夫などが考えられる。

(2)観光マーケティング戦略

①観光地として短期的評価と長期的評価を得るための取り組み

観光客が自分の観光ニーズを満たすために、ある観光地を選択し、行動するまでの段階を観光客情報処理モデルで考えてみたい。

観光客はある種の非日常性への欲求に対して、新聞・雑誌等に向かい→感覚（視覚・聴覚）器官が刺激を受け→観光地の情報収集や情報管理し、実際に行動して短期の評価を得る（観光地と

しては魅力ある観光地としての演出（感動・癒し・体験）→長期の評価（短期の評価の継続性の確保）を得て観光客の再訪等に繋げる仕組みづくりが必要と考える。

なお、石見銀山遺跡では拠点施設（ガイドンス施設）の立地場所を巡っている議論が行われた結果、ふれあい公園に決定した。議論の過程でもあったかもしれないが、石見銀山遺跡をとにかく歩いて、いろいろな遺跡を観てもらうための工夫・仕組みづくりをするとともに、石見銀山遺跡のイメージ形成に寄与できる施設がふさわしいと考える。その中で観光ルート毎の観光客の動線のあり方や、観光ルートとの位置づけをどのようにするのか考える必要がある。それには外形的には、鉱山遺跡と自然が融合した石見銀山遺跡のイメージに繋がること、内容的には石見銀山遺跡の価値を分かりやすく紹介できるとともに、観光客の学習への興味を支援できる施設として整備することである。

但し、それには拠点施設を観光客の徒歩空間にどのように組み入れるかが重要なテーマと考える。

1) 観光客から短期的評価を得るために

- a 観光旅行の目的は観光することで、その目的で観光体験は多くの場合、時速 4km の徒歩空間であり、魅力的な徒歩空間を提供できる観光コース・観光スポットをわかりやすく設定すること。とにかく歩いて心地よさ、楽しさ、癒しの雰囲気等が感じられること。
- b 徒歩空間に地域の生活感が感じられ、歴史・文化・景観・自然と程よくマッチしていること。
- c 中世の銀鉱石の採掘現場と灰吹き法による銀の製造工程がわかる体験型の施設が提供できること
- d 地域社会全体にホスピタリティ（もてなし）の高さを示すこと。

以上のことから、石見銀山遺跡（大森地区には、熊谷家等伝統的建造物群、清水谷製錬所跡、龍源時間歩、大久保間歩、釜屋間歩、城上神社、清水寺、山吹城跡ほか、温泉津地区には、沖泊^{おきどまり}地区、温泉津温泉、町並み伝統的建造物群、焼き物里ほか、馬路地区には、^{ともがうら}鞆ヶ浦や本因坊道策、馬路左官の饅絵、鳴り砂等）など地区毎に多数の観光スポットがある。佐毘売山神社などはパワースポットのエネルギーを秘めて感情が癒される場所が多数存在する。これらの観光スポット、パワースポットを始めて来訪する観光者向けに、歴史的な背景（大航海時代の鉱物資源の輸出のフロンティアの位置づけ）に自然を組み入れたテーマが必要である。



ともがうら
鞆ヶ浦の海岸

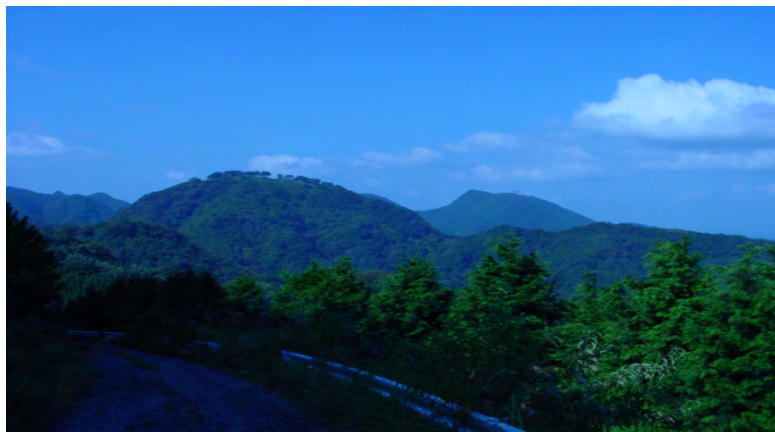


おきどまり
沖泊の鼻ぐり岩

2) 観光客から長期的評価を得るために

- a 観光客から長期的評価を得るには、長時間滞在、宿泊してもらう工夫・仕組みが必要である。具体的には、石見遺跡地区毎のモデルコース毎に、物語性に深みを持たせることや、石見銀山遺跡の歴史や文化をより興味をそそるような工夫や仕掛けを行い、それらの魅力を年々高める仕組み作りが必要である。それには遺跡・景観を年々整備していくことや、未だ解明されていない歴史・文化分野の研究をより深めることである。

例えば、モデルコースとしての仙ノ山には大久保間歩、本間歩、釜屋間歩等多数の鉱山遺跡が当時のままに維持・保存されているので、これを「鉱山遺跡の森」のテーマにしたの散策コースの設定等が考えられる。



また、付加価値の高い宿泊施設の整備や地元の新鮮な食材を使った地域性のある食事の提供がある。具体的には、良質な温泉の提供、心地よい宿泊施設、心に訴えるもてなしや真心サービスの提供等の付加価値を高める努力や当地のとれたての活き魚や山菜等環境にやさしく美味な食材を提供していく努力をする必要がある（石見銀山遺跡は環境にやさしいイメージがふさわしい）。

リピーター対策としては、非日常性や他の観光地と異なる石見銀山遺跡の独自の文化・風土が感じられ、それが観光客の心理的（満足感、安心感、信頼感）な良好なイメージに繋げることが必要である。

観光地としての品質（顧客満足度）を維持・向上させるため、宿泊施設、飲食店、タクシー、観光ガイドなどの予約窓口とクレーム窓口を一本化する。窓口を一本化することで、一定の品質以上の施設のみを観光客に紹介できるとともに、クレームを発生させる品質の低い施設には経営改善を指導し品質を向上させることを要求する。

こうした取組みを実効性あるものにするには、次に紹介する地域ブランド戦略が有効と考える。

b 地域ブランド戦略

地域ブランド戦略とは、行政と地域住民が一体となって、地域文化・歴史・風土等の地域のアイデンティティを明確にして、地域の人々が誇りを持つとともに、地域が自立する戦略的な取組みである。一般的な商品・サービス（観光）の基本的な機能は、機能価値（価値＝便益）、経済的価値（効用）、美的価値、倫理的価値の諸価値の複合集積した機能で構成されている。これを地域ブランドにするには、基本的価値に加えて、観光客への安心感、満足感、信頼感の「情緒的価値」と他の地域に対して石見銀山遺跡を表現する媒体価値を有する「自己表現価値」の2つの価値を構築する必要がある。具体的な戦略については、上記の価値を基に地域社会は住民のコンセンサスを得ながら立案・計画・承認の手続きを経て構築していくことが求められている。

②対象とする観光客層

石見銀山遺跡の場合、産業遺産・歴史遺跡・文化遺跡が海・山の自然環境と溶け合っているが、周遊型の観光地としてのアピール度は比較的乏しい。反面、大森地区、銀山地区、温泉津地区等をじっくり味わう「体験」、「学習」、「癒し」を求めている観光客にとっては良好な観光資源を有している。こうした観光客へ「体験型」、「鑑賞型」「学習型」の旅行を提供することである。また、石見銀山遺跡は未だ解明されていない歴史等を秘めている。これらの情報発信を通して、情報交換による相互理解のための観光客同士の交流の場を設ける等他の観光地とは違う観光客層の取り込みも重要である。

但し、従来型の観光（マス・ツーリズム）ニーズ対策も当然重要な問題で、産業遺産、歴史文化遺産等の分かりやすく説明することや駐車場、トイレ数、携帯通話エリア、観光客への安全対策等の整備は事前に入念に準備を進める必要がある。

③土産物の企画・販売

石見銀山遺跡のある大田市は、豊富で新鮮な海産物と農産物、三瓶牛、わさび等恵まれた食材のある地域である。但し、地域の人の中には、そのよさを知らない人も多く、また、他の地域へのアピールも不足していると感じる。こうした中で、現代は土産物の市場が変化して本物志向やクオリティ志向を強めている。このことは、本物の価値を提供できる土産物こそが生き残れる時代を迎えているとともに、地域性特性だけをアピールする手法も通用しにくい時代となっている。このため、地域の食材の良さを再発見・発掘する取組みを始めるとともに、生産・加工技術の独自性を発揮する技術力向上の取組みが求められている。こうした取組みをすることによって、観光客へ満足度の高い商品・メニューをできる基盤が整っていくものと感じる。

但し、商品には、価格、流通経路、広告、販売促進等マーケティング戦略が不可欠でこれらについてもよく検討したうえで、土産物の企画・販売を進める必要がある。特に無名の土産物を販売するにはかなりの努力が必要である。そのため、行政・地域社会は、石見銀山遺跡のイメージ・アップ戦略の中で、土産物とタイアップして売り出すことが必要である。一般的な価格設定は、原材料費と人件費等の総費用と一定の値入をした金額の合計額を価格とする原価主義的な価格設定が主流であるが、観光客が期待する価格と相違する場合が多く存在する。この点も土産物の持つ本質的価値、競合商品との価格比較等を行なったうえで、価格を決定する必要がある。また、販売促進についても、行政サイド、地域の多くの団体、企業が協力体制を構築し、地域が一体となって販売促進を展開する必要がある。

④観光客に対するサービスとホスピタリティ（もてなし）の高さ

観光客が石見銀山遺跡を訪れて本当に満足感を得るには、観光スポット、観光ルートの印象だけでなく、観光客を心地よくするサービスとホスピタリティ（もてなし）の高さが必要である。観光客が受ける不満は金銭や物品の提供では代償できるものでなく、また、再度やり直すことができないものである。事前に観光客が満足できる受入れ体制を整備することが必要である。

具体的にはハード面の整備では、

- 1) 交通機関・施設の整備
- 2) 観光施設の整備
- 3) 宿泊・飲食施設の整備等がある

次に、ソフト面の整備では、

- 1) 宿泊施設の機能サービス（温泉、ホームページほか）、精神サービス（もてなし心）の整備
- 2) いつも誰にも同じサービスが提供できる体制整備
- 3) ボランティアガイド等の体制整備等がある。

これらの整備をとoshi、観光客を温かく、やさしく、親切に迎える体制を行政・地域社会が一体となって取組む必要がある。こうした取組みには、実績や結果を評価・検証する仕組みを用意することも大切である。こうした仕組みは継続的な改善に繋がり、結果として石見銀山遺跡を持続的な観光地として存続することに繋がる。

具体的な交通機関・施設の整備としては、石見銀山遺跡へのアクセスの改善では、道路やバス運行の整備を進めることに加えて、大田市、出雲市・松江市の駅、出雲空港、石見空港との直行便の開設とその情報提供を整えることや、東アジアの主要空港との連携等を考える必要がある。また、駐車場の整備は、石見銀山遺跡のイメージや地域住民の生活にダメージを与えないことを踏まえて、整備を進める必要があると考える。

また、観光施設の整備としては、草木に覆われた鉱山遺跡、歴史・文化遺跡の復元作業や遊歩道を観光客が疲れにくく、また周辺環境にやさしい木道等に整備することが必要と考える。

(3) 観光収入による維持・保存の仕組み

石見銀山遺跡の維持・保存の仕組みを確実にするには、どうしても財務の裏づけが必要である。これを可能とするには、基本的には公的セクターの財政支援を中心に考えることになるが、これに加えて民間セクターでの資金創出策を準備する必要がある。それは、地方自治体も三位一体改革の中で、自治体経営の自立と主体性が要求されている時代背景がある。

そのため、民間セクターでも、石見銀山遺跡の維持・保存を目的するNPO法人による観光収入の仕組みやグランドワークトラスト等の公益法人の設立・活動が求められている。但し、行政セクター、民間セクターが一体として設立する第三セクターは、責任の所在が曖昧で不採算となりやすいので留意する必要がある、また、結果に対する責任体制も明確化しておくべきである。

具体的な公益法人の活動（NPO法人、グランドワークトラストほか）の資金創出活動は以下のとおりである。

- ① NPO法人等設立のための人材発掘・育成（マネージメント・リーダーの発掘）と組織体制（マネージメント・リーダーとは、地域の中でのコミュニケーション能力、コンセンサスづくり、強いリーダーシップ等組織を引っ張っていける人）の構築拠点施設の運営（指定管理者の受託、ホームページ更新管理、駐車場管理ほか）
- ② 入場料、ガイドブック（石見銀山、ジパング等）をパスポート等（有料化）の発行
- ③ ガイドの取り纏め、斡旋・仲介
- ④ 統一ロゴマーク・ラベル使用許諾（商標登録ほか）
- ⑤ 土産物・宿泊施設の紹介・斡旋ほか

なお、グランドワークトラストとは、環境問題などに対して対立関係になりがちであった住民・企業・行政がそれぞれ役割を分担しあい、パートナーシップによる協力関係によって地域の

環境改善に取り組むこと。イギリスで始められ、NPO法人三島グランドワークトラストの取り組みが注目されている。

こうした戦略的な取り組みをすることによって、自発的なファンクラブ等の支援者づくりに繋がりを、結果として観光収入による石見銀山遺跡の維持・保存ができる仕組みが構築されることになる。

第6章 石見銀山協働会議に対する期待

1. 石見銀山スタイルと協働会議の発足

石見銀山遺跡は分かり難いといわれる。一般的な観光地感覚で石見銀山を語ろうとすると非常に難しい側面をもっていることは多くの人が認めるところである。遺跡そのものが一般の観光地として馴染みにくい上、全国的にも認知度が高いとはいえないが、だからといってそのことが「石見銀山遺跡」は魅力のない遺跡ということにはならない。「石見銀山スタイル」の確立といっても「石見銀山スタイル」そのものが地域住民、行政の共通認識とまではなっていないのが現状である。

「石見銀山協働会議」が平成17年6月から立ち上がった。4つの分科会でそれぞれの立場から、それぞれの提言なり行動計画が示されつつある。しかしながら、行政のメンバーとして国土交通省、島根県建設部、学術部門として島根大学その他歴史関係の有識者メンバーが十分に機能しているとはいいがたい。「石見銀山協働会議」の分科会部門には「活用部会」「発信部会」が設置されているが、共通認識がなければバラバラの動きともなりかねない。そうした意味からも今一度、根本に立ち返って「石見銀山スタイル」の確立について基本認識を持つことが求められる。

2. 産学官の連携と強化

(1) 財政支援の限界

持続可能な世界遺産として石見銀山遺跡の維持発展を考える上では、運営上のソフト面、ハード面両面から検討されるべきであるが、これを支えるには財政的な裏づけがなければ成り立たない。短期的には世界遺産登録まで、あるいは登録後の当面は県・市の公的支援も見込めるとしてもいつまでも続く保証は無い。石見銀山遺跡を持続可能な施設として後世に伝えていくにはどうしても財政基盤を確立していくことが不可欠である。

いつまでも行政支援頼みという姿勢だけは排除し、自助努力の中で財政基盤を確立するのは容易ではない。今までの項目で具体例を挙げながら論じてきたことが全てではないが、可能性のあることは一つ一つ丹念に検討実施していく必要がある。石見銀山遺跡を自分達のものとしていく

ために、そうした労力を惜しまず、知恵を出し合っていかなければならない。

(2)30年かけた街づくり

世界遺産登録が順調に行けば本年（平成 19 年）に指定を受けることになる。官民上げた指定への取組は盛り上がりを見せてきているので、受け入れ態勢も十分とはいえないまでも整えられだろうと期待している。一方、各論で問題提起や対応策について述べてきた事柄も時間をかけていかないと解決できない問題も山積している。

大分県湯布院町は村おこし、街づくりでは全国的にも先進地として有名である。もともと福岡の奥座敷の温泉地として有名であったが、イベント開催や旅館経営者の努力により今では若い女性にも人気を誇る全国区の観光地となった。昭和 50 年頃の入り込み客数が 150 万人であったが、今日では 400 万人を超えるまでになっているという。30年で2.7倍の成長を遂げたことになるが、この間の関係者の努力は並大抵ではなかったと聞く。湯布院ブランドの形成は単に温泉を核として多くの観光客を呼び寄せているわけではない。景観、町のたたずまい、観光客へのもてなし・・・等、地域資源を資産として町民がたゆまなく守り続けてきた帰結でもある。何よりもその由布院らしさは観光客のためにあるものではなく、由布院に暮らす人々のものである。

幸い、石見銀山という「核」となる立派な資産が残されている大森町、大田市は無限の可能性も秘めている。銀山開発当初は、銀山は戦国諸大名の宝物であったかもしれないが、今では大田市民の宝物である。世界遺産登録後も「石見銀山ブランド」構築に向け継続的な努力が求められるよう。

(3)連携の重要性

石見銀山遺跡では、その全容と価値を明らかにするために平成 8 年度から島根県と大田市による共同の総合調査が行われている。発掘調査、古文書文献調査、科学調査、石造物調査、街道調査などが行われており内容的には充実が図られているが、学術材料として目新しいものは多くない。むしろ、その存在や歴史的価値の伝達方法に問題を残しているといえる。そうした面では「産官学」の「学」の役割が大きい。県立松江東高校では平成 15 年、文部科学省からスーパーサイエンスハイスクールの指定を受けたことを契機に石見銀山で行われた「灰吹法」による銀の精錬実験を授業に取り入れるなど歴史ある石見銀山を身近な素材として取り扱っている。また、島根大学では萌芽研究部門において「石見銀山地域～島根半島の古熱水系における複合資源システムとたたら鉄資源」プロジェクトにおいて「石見銀山の地球科学 鉱床の特徴、構成鉱物、生成過程」と題して島根県教育委員会、大田市（石見銀山課）と共同したパンフレットが作成されている。このように地道ながら「官」「学」の連携は少しずつ進みつつあるが、「産官学」全体をまとめる大きな動きとはなっていない。

「石見銀山協働会議」では官民協働事業として役割分担を行政が決定するのでなく地域住民、各種団体、ボランティア等が提案により作り上げるものとして設定されている。長期的な展望の中ではその主旨は活かされなければならないが「産学官」の「産」あるいは「民」の部分が非常に弱い現在にあってはもろさを感じる。「産」「民」の自立的な動きが順調になるまではもう少し「官」の「押し付けではない」「リード役」をもう少し期待したい。

「石見銀山協働会議」は、

【石見銀山に関わる人々が長い間に育んできた遺跡や町並みといった歴史的景観、またそこに住む人々の穏やかで静かな暮らしはしっかりと維持しながら、同時に来訪者をも巻き込んで世界遺産となる遺跡を保全・活用し、地域振興を図っていける地域づくり】

を目指す方向としている。組織的には「保全分科会」「受入分科会」「活用分科会」「発信分科会」に別れ、さらに 18 年 5 月には行動計画の一環として「銀山保全会議」が立ち上げられた。今後それぞれの分科会の立場から提言や行動計画が示されていくこととなろうが、全体として「石見銀山遺跡」がどのようにあるべきかについての『共通認識』が十分になされているようには窺えない。各分科会には

- ◆ 島根県文化財課
- ◆ 島根県地域政策課
- ◆ 川本総務事務所
- ◆ 大田市石見銀山課
- ◆ 大田市商工観光課
- ◆ 大田市企画振興課
- ◆ (旧) 仁摩町総務課・教育委員会
- ◆ (旧) 温泉津町総務課・教育委員会

ほか

が組織されているが、産学官の産の部分では地元商工会議所、商工会を始め地域の経済界、自治会など、学の部分では島根大学や地元研究家等との交流が求められる。さらにはボランティアグループなど幅広い連携が必要であろう。

3. 協働会議による展開

(1) 石見銀山協働会議

平成 17 年 6 月の会議の冒頭では今後の会議の進め方として、①行政からは基本的な原案は提示しない、②地域住民、各種団体、ボランティア等の自発的な活動を促す、ということになっている。官民協働事業として役割分担を行政が決定するのでなく、地域住民、各種団体、ボランテ

ィア等が提案により作り上げるものとして設定されている。長期的な展望の中ではその趣旨は活かされなければならないが、「産学官」の「産」あるいは「民」の部分が非常に弱い現在にあってはもろさを感じる。

また、協働会議は全体会議と 4 つの分科会で構成され平成 18 年 3 月に石見銀山の行動計画を策定した。行動計画は一定の成果はみられるものの、その合意形成の過程において、持続可能な石見銀山スタイルを地域でどのように実践していくのかや、「民」側に知識・情報不足と行政の協調的な運営等により実現可能性や問題解決力等に課題を残していると感じる。

こうした中で、協働会議は行動計画の意思決定の参画機関で、「民」の考え方を取り入れたメリットは決して少ないものではなかった。以下に具体的なメリットを述べる。

- ①利害関係者が関与したことから行動計画への協力や相互扶助が得られやすい。
- ②利害関係者の参画を通して行動計画の認識度を高める効果がある。
- ③行動計画の実現に向け支援態勢が整備され、地域社会で行動計画への広がりが期待できる。
- ④地域社会で石見銀山遺跡の価値を再確認できる機会を得るとともに、認識を深める効果があった。
- ⑤民間的な発想や考え方が行政側に良い意味で影響を与えた。

(2)協働会議の課題と対応策

前記で述べたとおり協働会議の行動計画に係る実践面や実現可能性に課題を残している。この課題を克服することが、行動計画をより実効性を高めるものとする。そうしたことから以下に課題と対応策について具体的に提案してみたい。

課 題	対 応 策										
持続可能な石見銀山スタイルを地域でどのように実践していくのか	持続可能な石見銀山スタイルの理念を目指すための地域指標を設定し、それを地域でチェック・検証できる仕組みを構築する。 <table border="1"> <tr> <th>指標項目</th><th>具体的指標</th></tr> <tr> <td>保存管理・自然環境指標</td><td>① ゴミの排出量・トイレ数 ② 遊歩道整備状況ほか</td></tr> <tr> <td>経済指標</td><td>① 小売・飲食業の売上げ高 ② 従業者数・宿泊数 ③ 間歩・資料館等入（館）場者数ほか</td></tr> <tr> <td>社会指標</td><td>① 地域住民の影響度調査 ② 地域住民の満足度調査ほか</td></tr> <tr> <td>教育・学習指標</td><td>① 学習会、自主講座の開催数 ② ふるさと学習の導入学校数ほか</td></tr> </table>	指標項目	具体的指標	保存管理・自然環境指標	① ゴミの排出量・トイレ数 ② 遊歩道整備状況ほか	経済指標	① 小売・飲食業の売上げ高 ② 従業者数・宿泊数 ③ 間歩・資料館等入（館）場者数ほか	社会指標	① 地域住民の影響度調査 ② 地域住民の満足度調査ほか	教育・学習指標	① 学習会、自主講座の開催数 ② ふるさと学習の導入学校数ほか
指標項目	具体的指標										
保存管理・自然環境指標	① ゴミの排出量・トイレ数 ② 遊歩道整備状況ほか										
経済指標	① 小売・飲食業の売上げ高 ② 従業者数・宿泊数 ③ 間歩・資料館等入（館）場者数ほか										
社会指標	① 地域住民の影響度調査 ② 地域住民の満足度調査ほか										
教育・学習指標	① 学習会、自主講座の開催数 ② ふるさと学習の導入学校数ほか										
行動計画の実現可能性を確保するには	実現性可能性を確保する条件として、観光事業の資金の確保をどのような手段・方法で用意または準備できるのかを事前に検討する必要がある。営利事業の原則は自己責任で行うことが原則であるが、事業に多額な費用が予想される遊覧船事業等リスクの大きい事業については、自ら事業リスクをとって、事業を立ち上げる「民」、「産」は当地方の経済環境では極めて少ないと思われる。この中で、「官」の役割は、そうした事業の助走期間の支援機関として、例えば、当初５年程度は行政からの補助金等の支援策を設けるなど財務施策を用意しておくことが、実現可能性の観点から有効な方法と考える。 また、ボランティアによる草刈等の基盤事業についても資金支援が必要である。何時までも「民」側の善意だけでは継続性や実効性は担保されないと考える。 但し、決して、安易な「官」頼みの事業を推進することではなく、あくまでも財政支援については、協働会議の場をとおして、客観的な立場から事業を審査したうえで、財政支援策を打ち出すことが、行動計画の解決の方向性の実現可能性を高めることに繋がるものとする。										

「産」あるいは「民」の側に情報不足や行政の協調的な運営等により問題解決力等に課題を残している	「産」「民」の自立的な動きが順調になるまでは、もう少し「官」の「押し付けではない」「リード役」を前面的に打ち出し、今しばらく「産」「民」の誘導・案内役に徹していただきたいと考える。 また、協働会議と「産」「学」「官」との連携強化、「官」側の産業部門、教育部門等内部部門の連携強化（例えば、部門間の横断的な組織の立ち上げや「民」側も「産」と「学」との連携強化や異業種交流の推進する必要がある。 もう一つは、協働会議の中で、「官」側に地域リーダーの発掘や育成の役割を担うことも期待したい。 以上の取組みが協働会議の課題解決能力向上に繋がるものと考ええる。
---	---

おわりに

本稿の脱稿間近に、「石見銀山遺跡」の拠点施設の中のガイダンス棟建築工事の祈願祭が、大田市大森町の「ふれあいの森公園」で本年（平成 19 年）2 月 22 日に行われるとのニュースが入ってきました。

開館は 8 月になるとのことですが、7 月 2 日の登録に向け秒読み段階に入っている中、大田市の竹腰市長は「このガイダンス棟は観光客の学習と案内拠点として大きな役割を果たす」とし、「国内外から多くの人を訪れる素晴らしい施設にしたい」と述べておられます。

われわれも、地元島根の一員として微力ながら協力を惜しまないことを誓って、締め言葉といたします。

平成 18 年度支部調査・研究事業
特異な世界遺産・石見銀山についての調査研究

編集発行
社団法人中小企業診断協会
島根県支部
平成 19 年 1 月発行

〒690-0048
島根県松江市西嫁島 1 丁目 4 番 5 号
（株）社長室内
TEL（0852）28-1600